

東北地方南部における縄文時代晩期後半土器型式の分布圏

小久保 竜也

要旨

東北地方南部における縄文・弥生移行期の土器は、「大洞式土器」と「鳥屋式土器」の2つの視点から研究されてきたが、資料的な制約から、2つの型式の分布域は曖昧なままであった。この課題を解決するため、本研究では東北地方南部における縄文時代晩期後半の土器型式を整理し、分布圏を明らかにした。一括資料や層位的な資料を用いて、下越地方と会津地方、浜通り・中通り地方のそれぞれで土器を3段階に細分し、器種と文様、文様帯の組み合わせを示した。この組み合わせを根拠に、各段階を型式にまとめ、3つの地域間、および隣接する山形県・宮城県南部の土器と比較した。その結果、下越地方と会津地方、浜通り・中通り地方と山形県・宮城県南部が器種と文様、文様帯の組み合わせで類似した。つまり、東北地方南部の土器は、下越地方と会津地方には鳥屋式土器、浜通り・中通り地方には、山形県・宮城県南部と共通する特殊工字文土器群が分布し、大洞式土器とは区別された。また、その境界は猪苗代湖以東にあることを指摘した。さらに、土器型式圏の動態を確認し、特殊工字文土器群が成立したことで、大洞A₂式併行期に東北地方における土器型式の分布に大きな組み換えが起こったことを明らかにした。

1. 問題の所在と研究の目的

本稿は、東北地方南部（おおむね現在の福島県域から新潟県域）における縄文時代晩期後半の土器を3段階に細分し、器種と文様、文様帯の組み合わせから、型式を再定義し、その分布について論じる。本稿の核となる主張は、東北地方南部の土器のうち、福島県浜通り・中通り地方の土器は山形県・宮城県南部と共通性が高く、「特殊工字文土器群」の分布圏と言え、会津地方と下越地方の土器は共通した型式内容を持ち、鳥屋式土器の分布圏であるというものである。つまり、東北地方南部の土器は、東半と西半とで型式内容が異なるということである。この型式圏は大洞A₂式併行期に大きな組み換えが起こった結果、生じたものである。

本稿で対象とする東北地方南部の縄文時代晩期後半土器は、大洞式と鳥屋式の2つの側面から研究されてきた。磯崎（1964）は、東北地方南部の土器は、山内（1930）が設定した大洞式土器とは異なる特徴をもつことを指摘した。下越地方に関しては、磯崎（1957）が、鳥屋遺跡の土器を基準に大洞A・A'式や水I式に併行する縄文時代晩期後半の土器型式として「鳥屋式」を設定し、石川（1988, 1993）が型式内容を詳述した。福島県域については、『福島県史』の中で大洞式土器の分布圏としての理解が示され（梅宮1964）、馬目（1970）が郡山市一人子遺跡の土器について議論

した際に、この遺跡の土器は、大洞A式文化圏だが、東北地方中部とは差異があり、浮線網状文文化圏にも入るとした理解がつよいインパクトを与えた。実際、東北地方南部の土器を、東北地方北部から中部の土器と同一系統として理解する研究がありつつも（鈴木1987）、会津美里町下ヶ谷地平C遺跡（芳賀・藤谷編1986）など、会津地方を中心に鳥屋2式土器が分布するという指摘がある（石川1991）。

以上のように、東北地方南部のなかで、下越地方は鳥屋式土器の分布圏と理解され、福島県域の土器は、大洞式土器や鳥屋式土器の双方の理解があるが、この地域の土器がどのような型式内容を持ち、どのような特徴を持つのかという問いは、中村（1988）や石川（1991）など以後、多くの研究者から等閑視されてきた。この問題は、良好な資料が少なかったことが原因であるが、2000年以降に、いわき市作B遺跡（高島・矢島編2004）、三島町小和瀬遺跡（吉野編2022）など縄文時代晩期末から弥生時代前期の資料が増加し、型式内容の詳細な検討が可能になった。

以上の問題意識を念頭に、本稿では、東北地方南部の土器を3段階に細分し、器種・文様・文様帯に注目して、型式内容を明らかにする。本稿の対象は、主に福島県域と新潟県下越地方の資料である。2章でこれまでの研究史を整理し、研究上の課題を抽出する。3章で東北地方南部において良好なまとまりと考えられる土器群を提示し、段階設定を行う。4章で器種・文

様・文様帯を中心に型式を再定義し、山形県・宮城県南部の資料と比較し、土器型式の分布圏を明らかにする。5章で今後の課題を提示する。

2. 研究史

2-1. 大洞式土器としての研究史

東北地方の縄文時代晩期土器の編年は、山内(1930)にはじまる。山内は岩手県大船渡市大洞貝塚の調査成果をもとに、亀ヶ岡式土器と総称された土器を、6段階に細別した。本稿で対象とする縄文時代晩期後半については、その後、山内はそれまでの大洞A式と大洞A'式の間に大洞A₂式を追加し(山内1964)、型式設定の経緯や内容を語った(平山ほか1971)。山内は東北地方中部で型式設定を行ったが、磯崎(1964:170頁)は「津軽方面、仙台湾地方、福島・新潟方面に3つの大きな地域色」が見られると述べた。つまり、東北地方南部は大洞式土器の分布圏とされながらも、それ以北の土器とは異なる地方型式が分布するとされた。こうした研究を背景として、福島県域の土器は地域性がつよいものの、大洞式土器として理解された。

具体的には、渡辺・馬目編(1966)は、『型式』名称の添付は慎重であらねばならぬ(同:120頁)とし、寺脇貝塚から出土した土器を大洞B~C₂式に比定した。梅宮(1964:3頁)は、「相馬市藤堂塚・耶麻郡西会津町上野尻・田村郡田村町御代田の各遺跡等からは大洞A'式的な要素と、関東地方の古い弥生的要素をもつ土器群が発見されている」と述べ、伊東(1970:28頁)は、西会津町上野尻遺跡から出土した

靱痕土器を紹介する中で、同遺跡の時期を「大洞C並行期から大洞A式、大洞A'式と弥生式土器を出す遺跡」とした。こうした立場を明瞭にした例が、馬目・古川(1970)が一人子遺跡の土器を位置付けた際の、「一人子遺跡の大洞A式期は広い意味での亀ヶ岡土器として大洞A式文化圏に属するが、」「浮線文土器との交渉をもち、浮線網状文文化圏にも入っている」と整理した研究である(図1)。こうした理解は日本列島全域の中でも位置づけられ(林1981)、広く定着した。1990年代には、「南奥大洞C₂式」などの呼称も使われた(鈴木_前1991)¹⁾。また、設楽(1994)は浜通り・中通り地方を大洞A式土器の分布圏としながらも、宮城県南部の土器との共通性も指摘した。

一方で、福島県域の土器を大洞式土器と異なる型式名で説明した研究もある。小滝(1961)は田子畑遺跡や鍛冶畑遺跡の土器を用いて独自の型式設定を試みた。中村(1988)は、下越地方と会津地方、浜通り・中通り地方の地域差を念頭に置き、大洞式との関係を明示しない形で、土器編年を行った。これらの研究は、福島県域に大洞式と異なる土器型式が分布した可能性を示唆する例である。

大坂(2012)は、「特殊工字文」を用いてこの立場を明瞭にした研究である。大坂(2009)は、山形盆地の土器を3段階に細分する中で、「変形匹字文」などと呼ばれていた文様が縄文時代晩期後葉から弥生時代前期まで継続することを指摘し、学史的な経緯を踏まえてこの文様を「特殊工字文」と呼んだ。「特殊工字文」は北上川流域の土器を用いて定義された文様であるが(高橋1993)、大坂はこの文様が山形県域を中心に高頻度で長期間にわたって用いられることを指摘し、このような呼称を提案した。さらに、「特殊工字文」の変遷過程と、浅鉢の器形との対応を明らかにし、この文様に特徴づけられる土器群を「特殊工字文土器群」と理解した。大坂(2012)は、この理解を進め、東北地方南部では、「変形匹字文」が施文されているために大洞A₂式土器や大洞A'式とされた土器は、ほとんどが弥生時代前期に下ると主張した。

特殊工字文が長期間施文されるという指摘は説得的であるが、福島県域においてこの文様が施文される土器が、すべて弥生時代前期に下るとは言えない。浜通り・中通り地方では、縄文時代晩期後葉から弥生時代前期まで特殊工字文に該当する文様が見られるとする報告があり(鈴鹿ほか編1988;松本ほか編1988など)、「特殊工字文土器群」が縄文時代晩期後半の福島県域にも分布するか検討する必要がある。

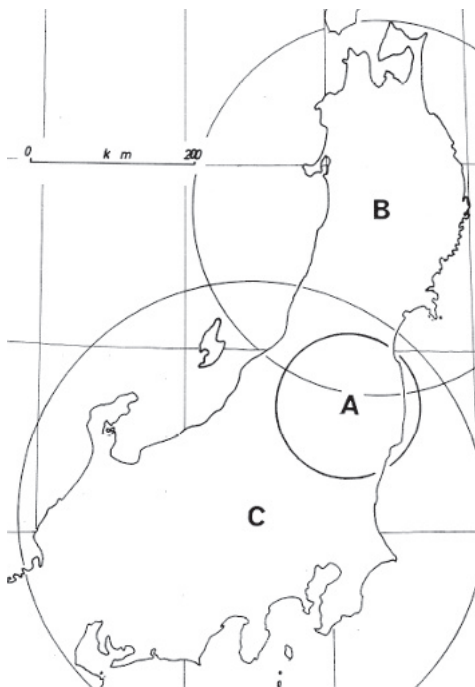


図1 土器型式圏の理解(馬目・古川1970)

2-2. 鳥屋式土器としての研究史

下越地方における縄文時代晩期後半の土器は、磯崎らの一連の研究の成果を受け、鳥屋式土器の枠組みで研究が進んできた。磯崎（1957）は、新潟市鳥屋遺跡の土器を基準に鳥屋式を設定し、「大洞 A 式の新しい部分」と大洞 A' 式と併行する可能性を指摘した。さらに、磯崎・上原（1969）は下越地方以南を亀ヶ岡式文化圏の「外殻圏」と位置づけた。

その後は、1987・89年に鳥屋遺跡が発掘され、鳥屋式の理解が大幅に進んだ。石川（1988, 1993）は、浅鉢の文様と器形の変化を組み合わせ、鳥屋式土器を鳥屋 1 式、鳥屋 2a 式、鳥屋 2b 式に細分し、それぞれ大洞 A 式古段階、大洞 A 式新段階、大洞 A' 式と併行する可能性が高いと指摘した。石川の編年案は一部修正の必要が迫られているが（石川 2002：60 頁）、広く利用されている。

福島県域は、2-1 で述べた通り大洞式土器の分布域と考えられてきたが、1980 年代以降には鳥屋式土器が分布するという指摘がある。中村（1982）は、「福島県域には浮線網状文が見られる」と述べた。石川（1984）は会津・新潟に浮線文土器群が分布し、福島盆地は浮線文土器群の本来的な文化圏ではないと述べ、石川（1991）は、会津地方では鳥屋 1 式後半期にあたる喜多方市沢口遺跡や同市金山遺跡の段階で浮線文が出現し、鳥屋 2a 式にあたる下ヶ谷地平 C 遺跡の時期まで継続すると主張した。設楽（1994）は、中通り・浜通り地方を「浮線文土器の外郭地域」と述べた。大坂（2012）は地域を広げ、浜通りや中通りも含めた福島県域の縄文時代晩期後葉から末葉の土器は「浮線網状文の系統で捉えなおすのが適切である」とした。

大坂は、福島県域には縄文時代晩期末には浮線文土器、弥生時代前期には変形工字文を含む沈線化の進んだ土器が見られるとしたが、層位や一括資料で両者を分離することは現状の資料では難しい（小久保・富高 2025）。浮線文と特殊工字文の分布域は、慎重に議論する必要がある。

したがって、本稿の主な問題意識は以下の 2 点である。①「特殊工字文土器群」が東北地方南部にも分布するか。②東北地方南部の土器型式の分布圏はどのようなものか。本稿では以上の 2 点を検討する。

3. 縄文時代晩期後半土器の段階設定

3-1. 段階設定の方法

東北地方南部における土器は、下越地方において高精度の編年が行われている（荒川 2023；荒川編 2004；石川 1988, 1991, 1993）。したがって、下越地方における土器を段階設定した後、福島県域の資料を下

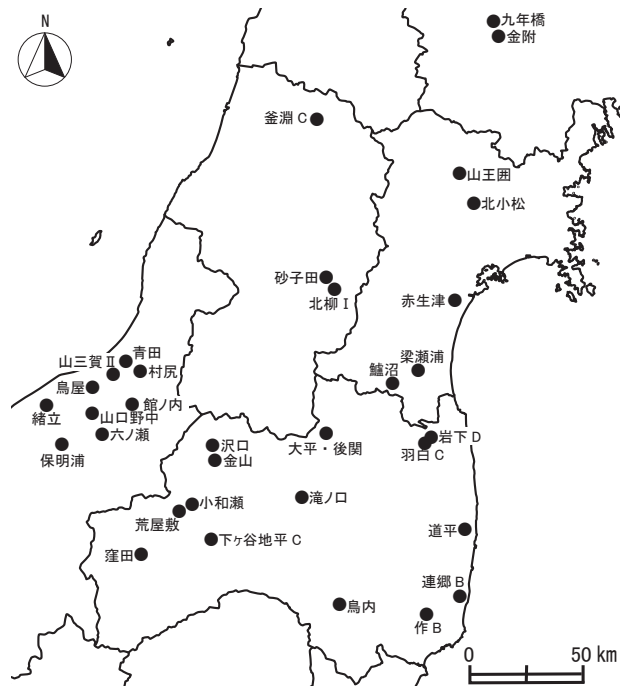


図2 本稿で扱う遺跡

越地方の資料と比較する方法で段階設定する（図 2）。

各段階の特徴は、器種、文様、文様帯の 3 つに注目する。器種は壺、注口、浅鉢、台付浅鉢、鉢、深鉢、甕に分類する。この基準は荒川編（2004：90 頁）の整理を東北地方南部全域に適用できるようにしたものである。頸部がつよくすぼまる土器を壺、台がつく浅鉢を台付浅鉢とし、注口部が残存するものを注口土器とした。器高/口径が 0.6 以下のものを浅鉢、0.6～0.8 のものを鉢、0.8 以上のものを甕・深鉢とした。甕と深鉢の分類は、頸部にくびれを持つものを甕とし、持たないものを深鉢とした。文様は、精製土器の体部文様（II 文様帯）と粗製土器の地紋を比較した。文様帯は、山内（1964）の I 文様帯と II・II c 文様帯を基本とし、一部で II' 文様帯を追加した。石川（1985）は異なる呼称を用いているが、I 文様帯は「a 口縁部文様裝飾帯」、II c 文様帯は「c 肩部文様裝飾帯」、II 文様帯は「d 胴部文様裝飾帯」にあたる。

3-2. 下越地方

3-2-1. 館ノ内 D 段階

設定方法 館ノ内 D 段階は、新発田市館ノ内遺跡 D 地点 65a 号土坑の土器（田中・鶴巻編 1992）を基準に設定する。この土坑は長径約 95 cm、深さ約 30 cm で、16 点の土器が報告されている。この内、つぶれた状態で出土した 12 個体（図 3-1～12）が埋置された土器と判断されており、これら 12 個体を基準資料とする。これらの土器は、鳥屋遺跡（石川 1988）の出土土器から青田遺跡（荒川編 2004）で出土した土器

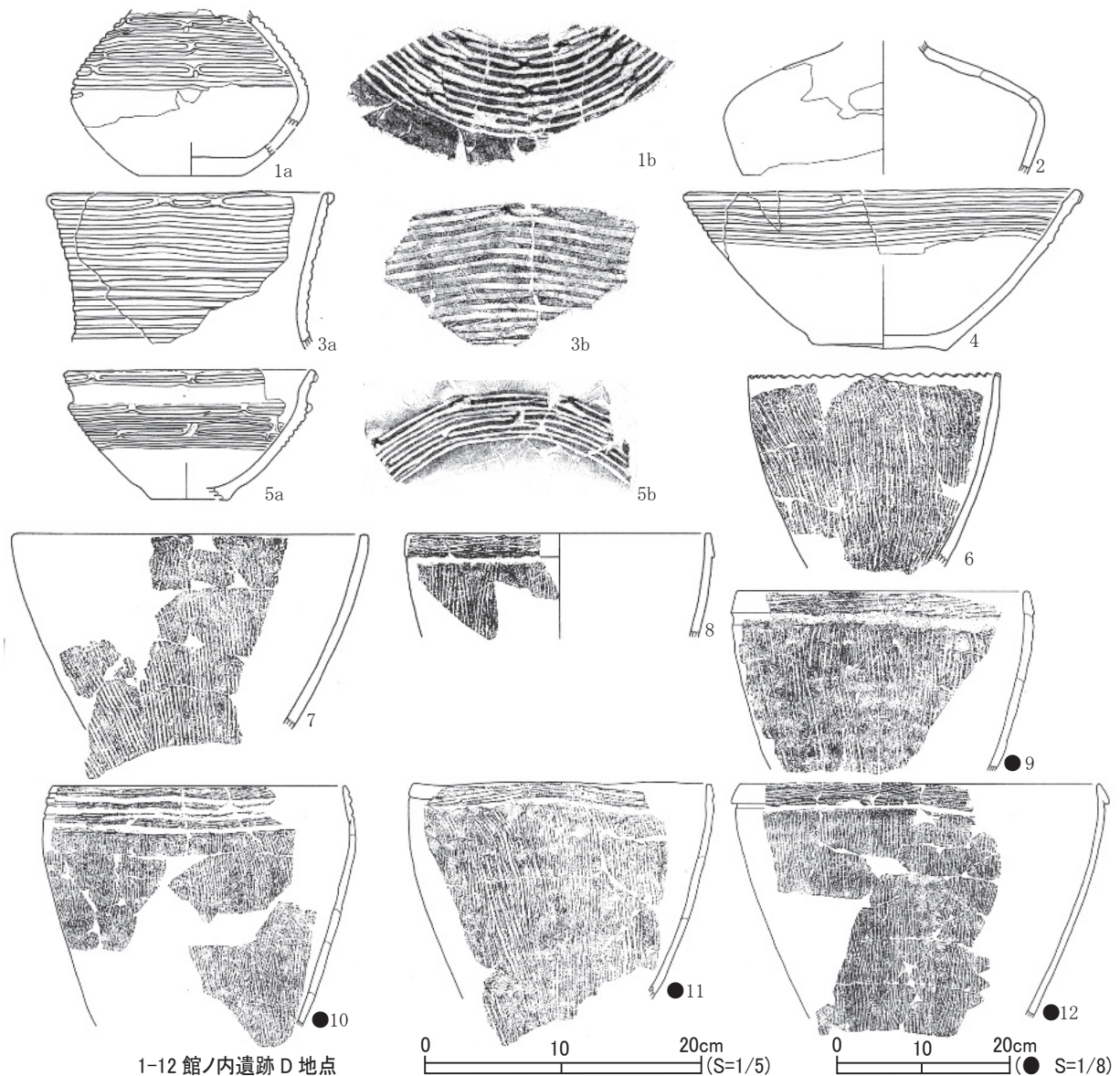


図3 館ノ内D段階の土器

と同様の土器を除外することでほぼ同内容の土器群を得られ、青田遺跡の土器に先行する時期の土器である。

器種 壺・浅鉢・鉢・深鉢で構成される。後続する青田古段階（後述）と異なり、壺が多く、甕がわずしか見られないのが特徴である²⁾。東北地方中部における縄文時代晩期後葉の土器（小久保2023）と異なり、台付浅鉢が見られない（表1）。

文様 精製土器は、器面全体に平行沈線を何条もめぐらせ（図3-3・4）、一部を上下に三角形に彫去して、左右に間延びした工字文風の文様を施文する（図3-1・5）。文様は割り付けを意識せずに施文されるため、単位は土器ごとにばらつきがある。粗製土器は、粗い条痕を縦位に施文する例が最も多く、肥厚した口縁部には、平行沈線や横位の条痕が見られる

（図3-8～12）。

文様帯 壺は胴部文様帯（Ⅱ）を持つ（図4-1）ことは確実であるが、頸部文様帯（Ⅱc）はなく、口縁部が残存する個体が少なく、口縁部文様帯（Ⅰ）がみられるかは明らかでない。浅鉢は口縁部文様帯（Ⅰ）と胴部文様帯（Ⅱ）を持ち、くびれがある器形の場合はⅠとⅡの間に無文帯を持つ（図4-2）が、頸部文様帯（Ⅱc）をもたない。

他の代表的な資料 館ノ内遺跡D地点の4号住居や包含層に、館ノ内D段階の土器が前後の時期と混ざって出土している。田上町保明浦遺跡SI-101（田畑編2003）³⁾と新発田市村尻遺跡1号土坑（新発田市教育委員会1982）、同市山三賀Ⅱ遺跡出土土器（坂井編1989）もほとんど同じ型式内容をもつ。

表1 各段階の器種組成

地域	段階/ 器種	壺	注口	浅鉢	台付 浅鉢	鉢	深鉢	甕
下越地方	館ノ内D	○	-	○	-	○	○	-
	青田古	△	-	◎	△	○	○	○
会津地方	青田新	△	-	◎	△	○	○	○
	沢口	○	-	○	-	○	○	△
	下ヶ谷 地平C	△	△	◎	△	○	○	○
浜通り・ 中通り	小和瀬	△	△	◎	△	○	○	○
	連郷B	△	△	○	-	○	○	△
	羽白C	△	△	◎	△	○	○	○
山形盆地	作B古	△	-	◎	△	○	○	○
	釜淵C	◎	○	○	◎	○	○	-
	砂子田	△	-	◎	△	○	○	-
	北柳I	△	-	◎	△	○	○	-

◎：精製土器の主体を占める ○：多く見られる
△：少数のみ見られる -：見られない

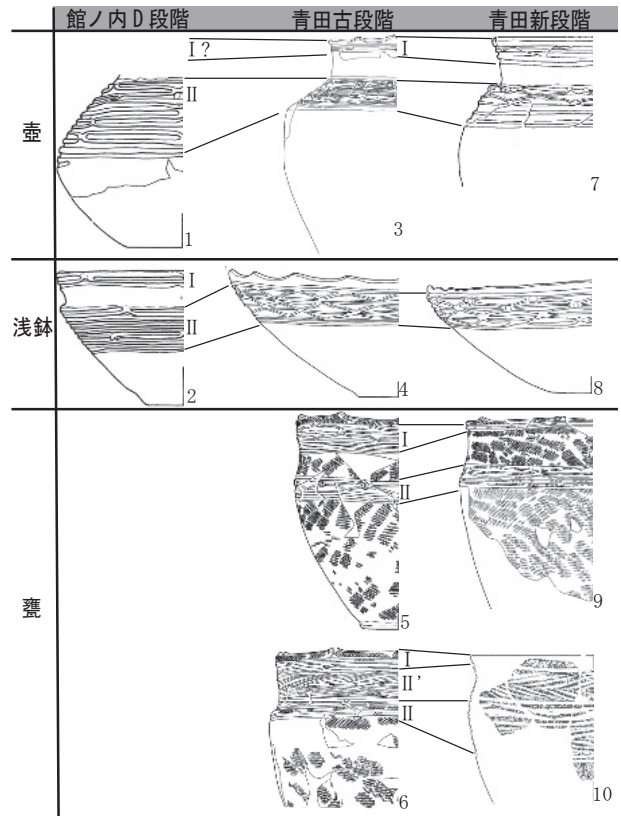
3-2-2. 青田古段階

設定方法 青田古段階は、青田遺跡 SD19 と中央地区、右岸1地区のD層～S4層出土土器（図5-1～31, 図6-32～48）を基準に設定する。S4層の上層であるS3層～S1層では、器種は全く変化しないが、器形や文様にわずかな違いが認められるため、青田新段階（後述）とした。

青田遺跡では、SD19 と SD1420 の2本の旧河道から、洪水による砂層と包含層が交互に堆積しており、層位的に土器の変遷を追うことができる。報告書によると青田遺跡D層～S2層が鳥屋2a式、S1層～SD1420-1層が鳥屋2b式、SD1420-B9～B7層が弥生時代初頭に該当し（荒川ほか編2004）、石川（1988, 1993）と整合的である。

ただし、鳥屋2a式と鳥屋2b式の細分は年代幅を考慮する必要がある。青田遺跡の木柱を用いた酸素同位体比年輪年代法の成果から、掘立柱建物の存続期間が、下層集落では540～522 BCE、上層集落では477～468 BCEであり（荒川2018；荒川編2004）、この約70年の中で土器の時期を細分することは難しいと考えられる。しかし、後述する会津地方では、鳥屋2a式と2b式のそれぞれに対応すると思われる一括資料が存在するため、下越地方でも鳥屋2式を細分できると考え、青田遺跡の土器を時期的に二分する。古段階と新段階では、共通する特徴を持つ土器が多く、土器の新旧はおおまかな傾向として把握できるに過ぎない。

器種 壺・浅鉢・鉢・深鉢・甕で構成される（表1）。館ノ内D段階からの変化は、精製土器の中で壺の占める割合が大幅に少なくなり（図5-1～5）、浅鉢が圧倒的に多くなる（図5-6～22）点と、甕が出現する（図6-32～48）点である。また、台付



1-2 館ノ内遺跡D地点 3-10 青田遺跡

図4 下越地方の文様帯

浅鉢がごく少数出現する（図5-27～28）。

文様 精製土器の文様は、館ノ内D段階では工字文風の文様を作出したが、青田古段階では、ネガ文様が沈線ではなく面的な彫去となり、浮線文に変化する。

すべての浮線文のモチーフは、ネガ文様に注目すると主文様が三角形・菱形・弧線の組み合わせによって作出される。ネガ文様の組み合わせの数を変化させたり、一部で長楕円形の補助文様を充填したりすることで、バリエーションを生み出す（図7）。青田古段階で見られるのは、A.三角形、B.ひし形、C.弧線、D.三角形+ひし形であり、E.三角形+弧線はみられない。段数は、A.三角形では2（A1）・4（A3）・6段（A5）、B.ひし形では1（B1）・4（B3）段がみられ、ともに補助文様が入り、C.弧線では2～5本のもの（C2・C4～7・C10）が見られる。D.三角形+ひし形では、三角形4段+ひし形1段（+補助文様）（D2・D4）、三角形2段+ひし形2段（+補助文様；D7・D8）、三角形2段+ひし形4段（+補助文様；D11）、三角形2段+ひし形6段（D12）である。青田新段階と比べて、A・Bで、楕円の補助文様が少ないが、Dは補助文様が多い。施文技法の傾向は、ネガ部分は面的で丁寧にミガキ処理して整えており⁴⁾、棒状工具の痕跡が確認できる場合がある。隆線は、三角形やひし形の彫去を行った後、稜をナデ調整しているために、

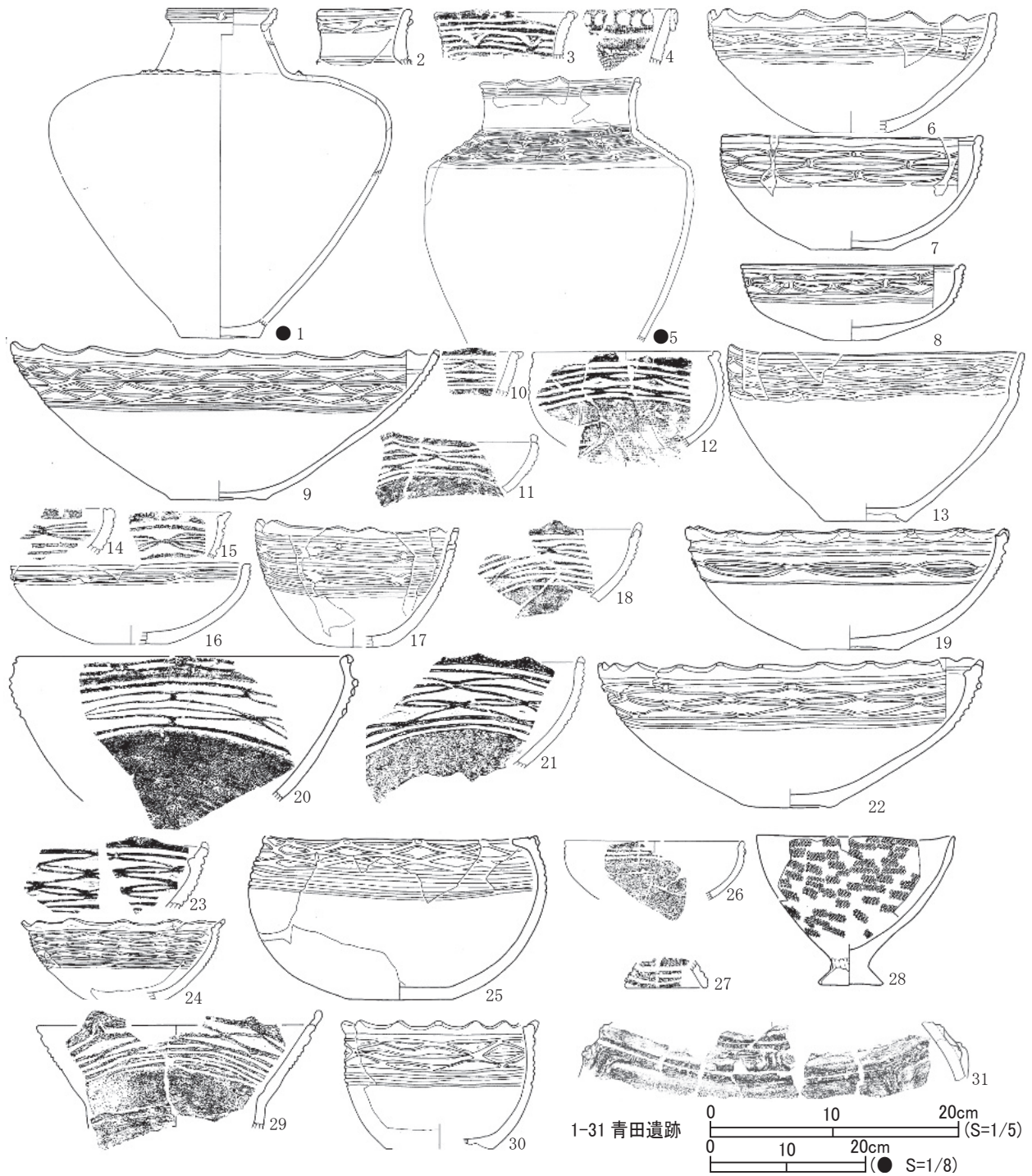


図5 青田古段階の土器 (1)

ボジ部分が平らなものが多い (図8-1)。

半精製の甕には、「く」の字状の矢羽状沈線文 (小久保 2023 の矢羽状沈線文 C 類) や三角形のモチーフが多く施文されており (図6-35~37)、壺や浅鉢に矢羽状沈線文が多く施文される東北地方中部と異なる。

半精製・粗製土器の地紋では、甕と深鉢で共通して縄文がもっとも多く (図6-32~36・40)、結節縄文もある (図6-40)。館ノ内 D 段階のような粗い条痕

文もあるが (図6-45)、条が細かく、定型化した細密条痕が縦位に施文されることが多い (図6-41)。撚糸文はごくわずかであり (図6-42)、網目状撚糸文は全くみられない。粗製土器の口縁部装飾は、突起 (図6-42・44) や平行沈線 (図6-41)、肥厚口縁 (図6-38) がある。

文様帯 青田古段階の文様帯は、基本的には口縁部文様帯 (I) と胴部文様帯 (II) があり、頸部文様帯 (II c) はみられないが、器種ごとの変異が大きい。

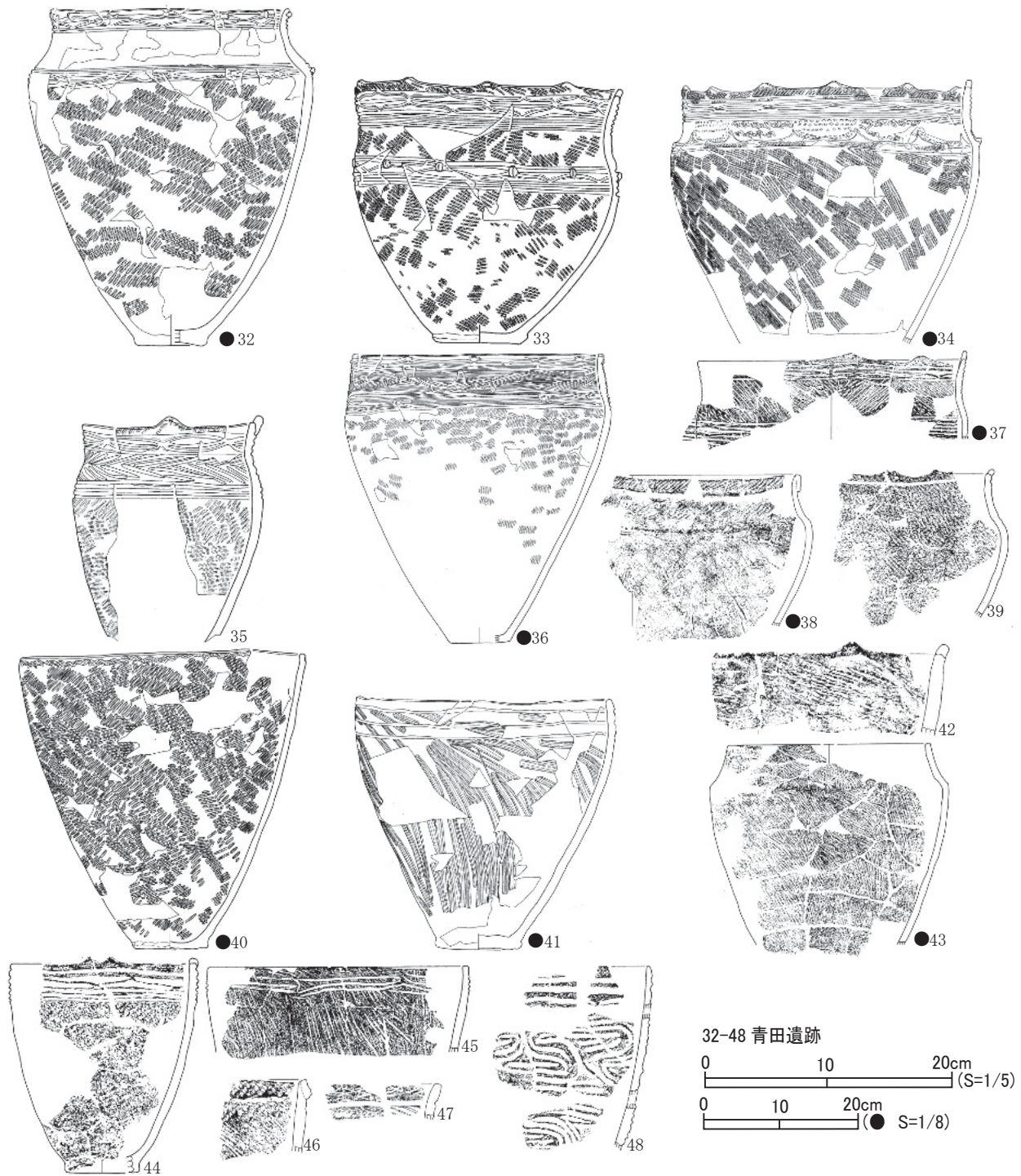


図6 青田古段階の土器 (2)

壺は口縁部文様帯 (I) と胴部文様帯 (II) を持ち (図 4-3)、II の幅は館ノ内 D 段階よりも狭くなる。浅鉢は館ノ内 D 段階と同じ幅の胴部文様帯 (II) を持つが、口縁部の文様帯 (I) と I と II の間の無文帯が消滅する (図 4-4)。これは大洞 A' 式でみられるような I と II の合体 (山内 1930) とは言い切れない。甕の文様帯は特異であり、基本的には口縁部文様帯 (I) と胴部文様帯 (II) を持つ (図 4-5) が、まれに II の文様が I と II の間の無文帯に転移する (今村 1983)

現象があり、この文様帯を II' とする (図 4-6)。II' には浮線文ではなく矢羽状沈線文が施文される例が多い。

他地域との併行関係 青田古段階は東北地方中部の縄文時代晩期後葉に併行する。図 5-26 は、精良な胎土に工字文が施文されていることから、東北地方北・中部からの搬入品と考えられる。この土器は九年橋 17 号焼土段階や九年橋 10 号土坑段階 (小久保 2023) の台付浅鉢とみられ、青田古段階はこれらの段

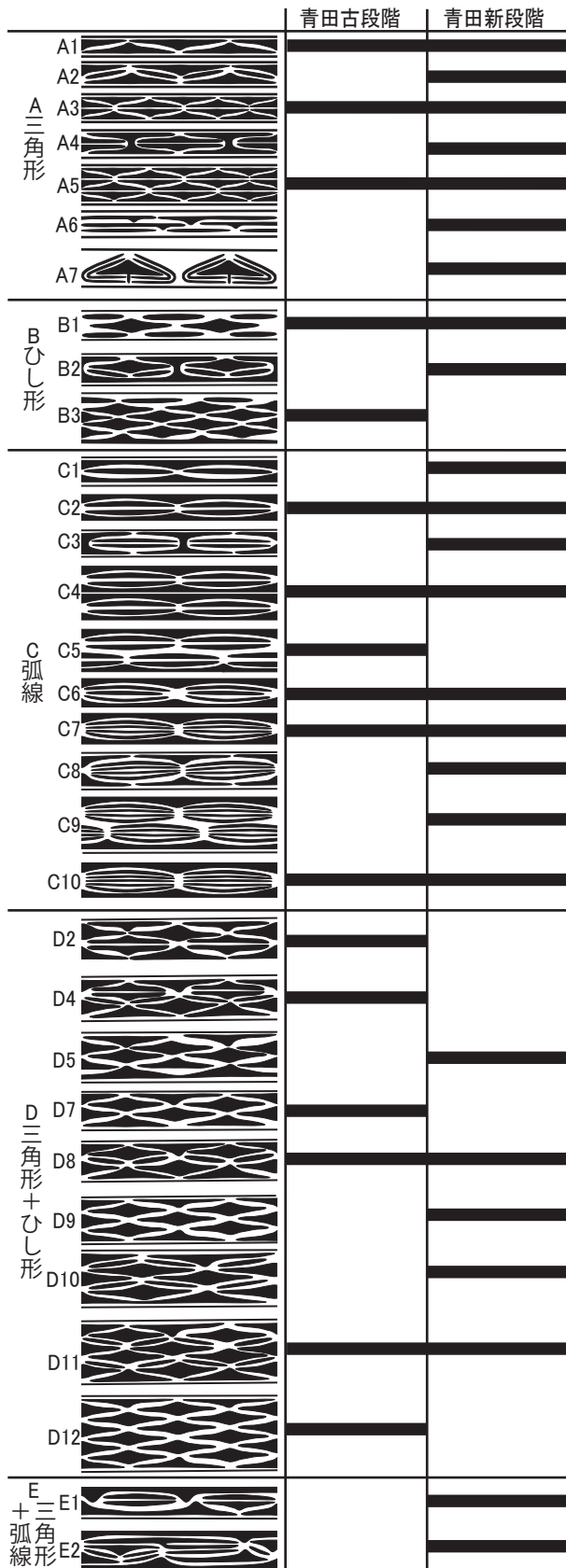
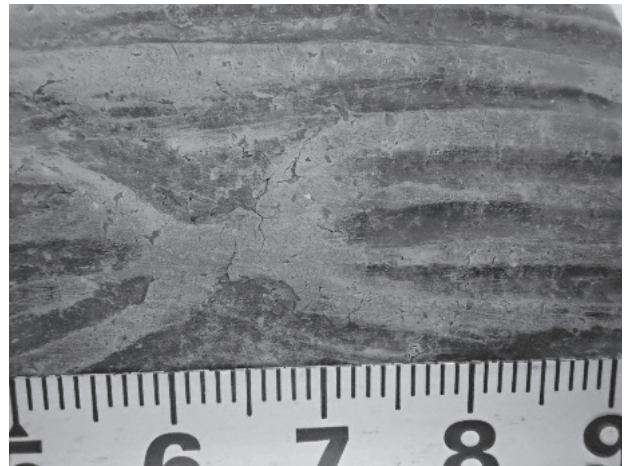


図7 下越地方の浮線文モチーフ

階と併行する。

他の代表的な資料 青田古段階のみが出土する遺跡・遺構はほとんどなく、次の青田新段階と共に出土する



青田古段階（青田遺跡 S5 層出土）



青田新段階（青田遺跡 S1 層出土）矢印はキザミの位置

図8 浮線文の施文技法

例が多い。こうした例は、阿賀野市山口野中遺跡（村上編2015）など下越地方各地にある。

3-2-3. 青田新段階

設定方法 青田新段階は、青田遺跡 S3～S2 層と、S1 層のうち下層（SD1420 右岸 2・3 地区の 1 層以下の層）から出土した土器（図 9 - 1～41, 図 10 - 42～55）を基準に設定する。青田古段階の土器と共通する特徴が多いが、一部で異なる特徴を指摘できる。

器種 青田新段階の器種は、壺・浅鉢・鉢・深鉢・甕で構成されており、青田古段階から変化しない（表 1）。各器種の器形もほとんど変化しておらず、器種や器形から時期を細分することはできない。

文様 精製土器には青田古段階と同様に浮線文が施文されるが、モチーフが一部変化する（図 7）。最も大きな変化は図形の組み合わせであり、青田古段階では、A. 三角形、B. ひし形、C. 弧線、D. 三角形+ひし形のみがあったが、青田新段階では、E. 三角形+弧線が出現する。A～E 類それぞれで青田古段階と比べて、段数が減少傾向にあるが、A・B では、楕円の補助文

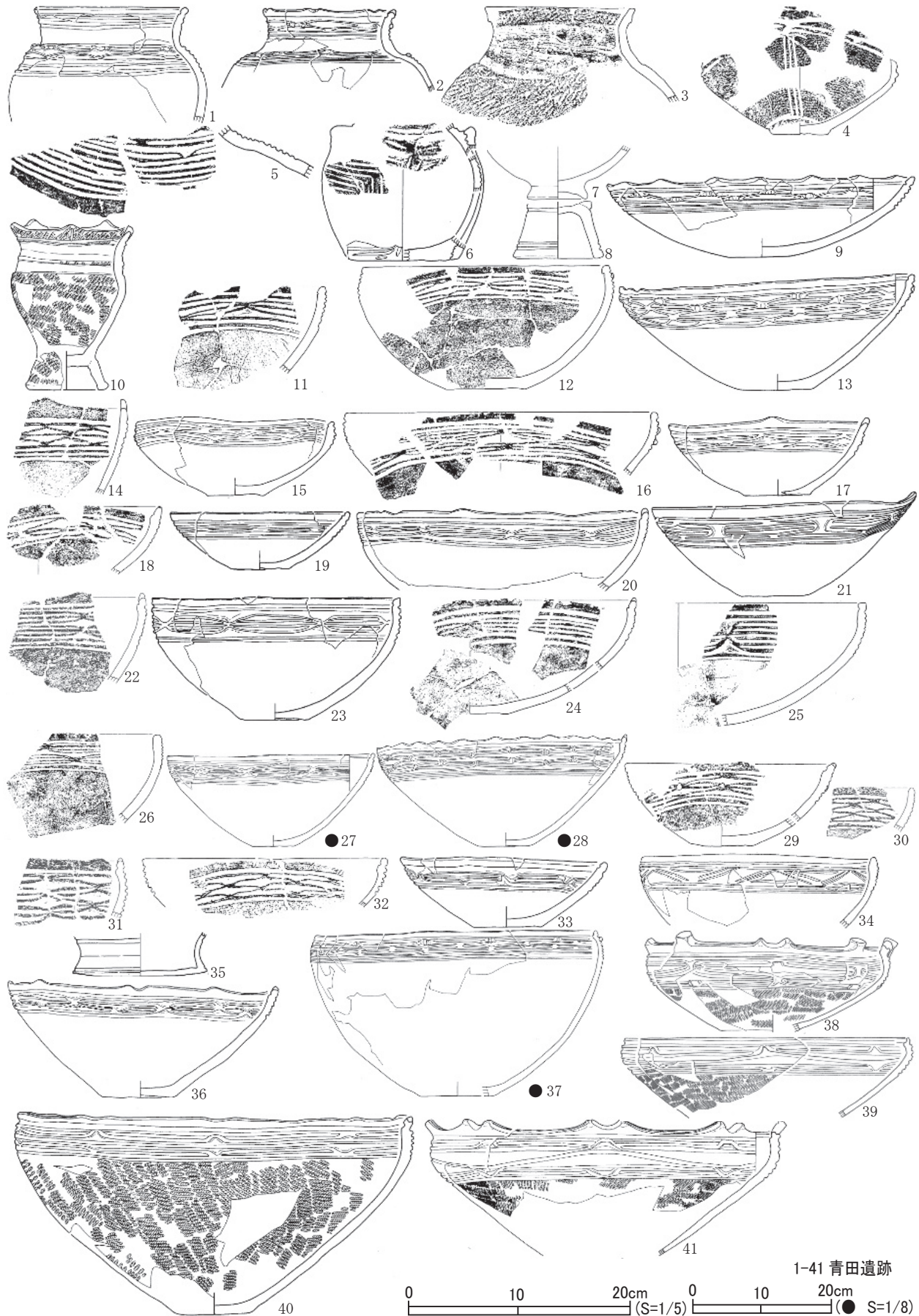


図9 青田新段階の土器 (1)

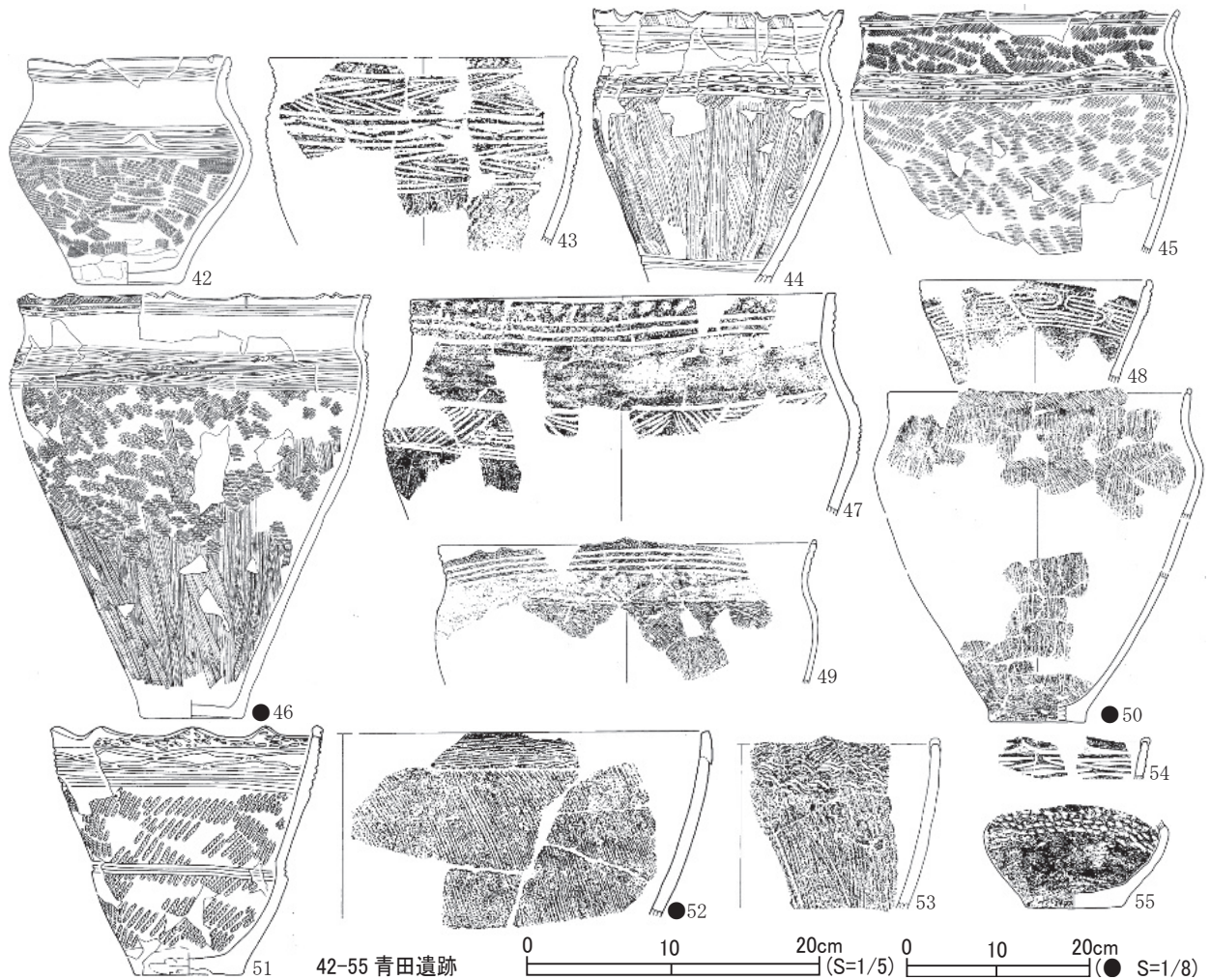


図10 青田新段階の土器 (2)

様が多用されるようになり、文様が簡素化するとは言えない。

各系列の段数は、A. 三角形では2 (+補助文様; A1・A2)・4 (A3)・6段 (A5) であり、1・4段目の三角形が結合する形 (A4) や、三角形が扁平化したもの (A6)、三角形1段のもの (A7) があり、モチーフの扁平化が進む。B. ひし形では1段 (+補助文様; B1・B2) があり、4段 (B3) が消滅する。C. 弧線では2~5本のものに加えて、新たに1本のモチーフが出現する (C1)。2・4本の例では弧線の上下のネガ文様が2分割されて三角形になっており (C3・C8)、E. 三角形+弧線とも理解できる。D. 三角形+ひし形では、三角形3段+ひし形2段 (D5)、三角形2段+ひし形2段 (+補助文様; D8)、三角形2段+ひし形3段 (+補助文様; D9)、三角形2段+ひし形4段 (+補助文様; D11) のものがあり、D1やD9が消滅する。新たに加わったE. 三角形+弧線では、弧線の部分が一部三角形に置き換わり、補助文様が充填されており、上下に狭い文様でありながら

も複雑なモチーフである (E1・E2)。なお、青田新段階で出現するモチーフはすべて青田古段階までのモチーフから生じる。

モチーフに加えて、浮線文でも新相の特徴とされる浮線の交点にみられる点刻 (石川1993) は、青田古段階では小片にまれにみられるのみであったが、青田新段階では頻繁にあり (図8-2の矢印, 図9-2・9・13・28)、浮線文を時期区分する上で有効である。

施文技法の傾向は、ネガ部分が上下に狭くなり、ミガキ処理が行われない場合が多い。隆線は、ネガ文様を作出した後、稜をナデ調整しなくなり、ポジ部分がつよい稜をなすものが多い (図8-2)。

半精製の甕や粗製の深鉢には、青田古段階と同様に、「く」の字状の矢羽状沈線文や三角形が多く施文される (図10-43・47)。

半精製・粗製土器の地紋では、甕と深鉢で共通して縄文がもっとも多く、(図10-45・46・49) 結節縄文も残る (図10-53)。館ノ内D段階以来の粗い条痕文はなく、細密条痕が縦位に施文されることが多い (図

10 - 44・46・52)。撚糸文や網目状撚糸文はまったくみられない。粗製土器の口縁部装飾は、まれに突起があり(図10 - 49・53)、平行沈線や肥厚口縁(図10 - 52)がある。

文様帯 青田新段階の文様帯の構成は、青田古段階からまったく変化しない。壺は口縁部文様帯(I)と胴部文様帯(II)を持つ(図4 - 7)。浅鉢は口縁部文様帯(I)がなく、胴部文様帯(II)がある(図4 - 7・8)。甕は基本的には口縁部(I)と胴部上半文様帯(II)の2つの文様帯を持つが(図4 - 9)、まれにIIの文様がIとIIの間の無文帯に転移し、II'文様帯となることがある(図4 - 10)。

他地域との併行関係 青田新段階は、東北地方中部の縄文時代晩期後葉から末葉に併行する。図9・図10に図示した土器には、精良な胎土に匹字文や変形工字文が施文されていることから、東北地方北・中部からの搬入品と考えられる土器がある(図9 - 5・35・38~41)。

5は壺の肩部であり、九年橋遺跡10号土坑段階(小久保2023)に多い、狭い文様帯に三角形が組み合う工字文を施文する。38・39・41は東北地方北・中部に多い浅鉢や台付浅鉢であり、変形工字文が施文されることから、金附遺跡ST01捨て場4 - 5層(斎野2011;三浦2016)の段階である。35は南部型丸底鉢の底部であり、つよく張り出す器形から北柳I段階(大坂2012)に比定できる。40は三角形が背中合わせになるタイプの匹字文が施文される浅鉢であり、砂子田段階か北柳I段階(大坂同上)の土器である。したがって、青田新段階は、東北地方中部の九年橋10号土坑段階から金附遺跡ST01捨て場4 - 5層の段階と砂子田段階から北柳I段階に併行する。

他の代表的な資料 新潟県阿賀野市六ノ瀬遺跡(石川1993)の遺物集中と、新発田市村尻遺跡126号土坑(新発田市教育委員会1982)が同時期の一括資料として知られる。

3-2-4. 先行研究との比較

上記の段階設定は、石川(1988, 1993)の編年と整合的であり、館ノ内D段階、青田古段階、青田新段階がそれぞれ、石川の鳥屋1b式、鳥屋2a式、青田新段階が鳥屋2b式に該当する。荒川編(2004)とは異なっており、荒川はS2~S3層を鳥屋2a式(古)とするが、本研究は青田新段階とする(表2)。

3-3. 会津地方

3-3-1. 沢口段階

設定方法 喜多方市沢口遺跡(渡辺編1983b)出土

土器の一部を基準とする。この遺跡の包含層は、南西から北東に向かうにつれて新しい土器が出土する傾向があり、B5・C5グリッドでは縄文時代晩期前葉の土器が、A1グリッドでは下ヶ谷地平C段階(後述)の土器が多く出土した。これらのグリッド以外には、縄文時代晩期中葉から後葉と考えられる土器が混在しているが、このうち館ノ内D段階と類する土器を抽出し、沢口段階とする(図11 - 1~38)。

器種 沢口段階の土器は、壺・浅鉢・鉢・深鉢・甕で構成される。精製土器の主体が壺と浅鉢である点、館ノ内D段階と共通する。甕がわずかしみ見られない点は、後続する下ヶ谷地平C段階と異なる(表1)。

文様 精製土器は、器面全体に平行沈線を何条もめぐらせる(図11 - 12・14)文様や、楕円状の沈線が結合し、左右に間延びした工字文風にした文様(図13 - 2・11・13)がある。壺や浅鉢、半精製甕にはまれに矢羽状沈線文が施文される(図11 - 2・25・26)。

粗製土器の地紋は、縄文と細密条痕がもっとも多く、甕と深鉢に共通して施文される(図11 - 36・37)。撚糸文や網目状撚糸文、結節縄文も多く、深鉢に限って施文される(図11 - 31・33・34)。館ノ内D段階に多い、粗い条痕を縦位に施文する例はほとんどみられない。口縁部装飾は、キザミ(図11 - 35)や肥厚口縁(図11 - 32・36)がある。

文様帯 沢口段階の土器の文様帯は基本的には口縁部文様帯(I)と胴部文様帯(II)の2つの文様帯から構成され、頸部文様帯(IIc)はみられない。壺は口縁部(I)と胴部文様帯(II)を持つ(図12 - 1)。浅鉢は、狭い口縁部文様帯(I)と胴部文様帯(II)を持つ(図12 - 1・2)。館ノ内D段階と異なり、くびれがある器形の浅鉢がないため、IとIIの間の無文帯はみられない。甕は口縁部文様帯(I)と胴部文様帯(II)を持ち、IIの文様がIとIIの間の無文帯に転移し、II'文様帯となることがある(図12 - 3)。

他地域との併行関係 沢口段階は、器種組成と精製土器の文様、文様帯の構成が館ノ内D段階とほとんど

表2 下越地方の段階と先行研究

本稿	荒川編(2004)	石川(1988, 1991)	大坂(2009, 2012)
-	-	鳥屋1a	-
館ノ内D	-	鳥屋1b	鳥屋1
青田(古)	鳥屋2a(古)	鳥屋2a	鳥屋2a
	鳥屋2a(新)		
青田(新)		鳥屋2b	鳥屋2b
	鳥屋2b(古)		
	鳥屋2b(新)		滝ノ口

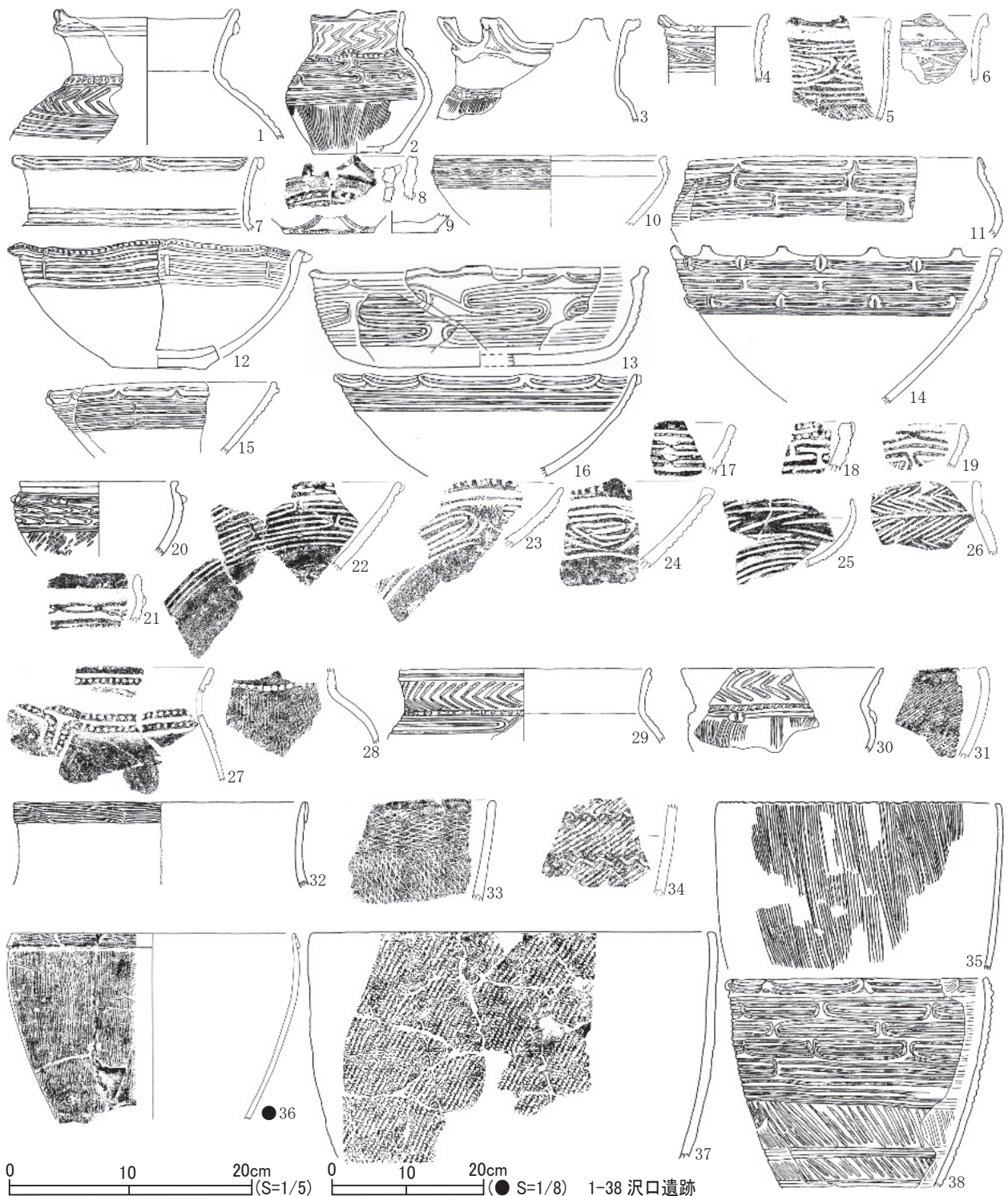


図 11 沢口段階の土器

同じであり、同時期と考えられる（表3）。

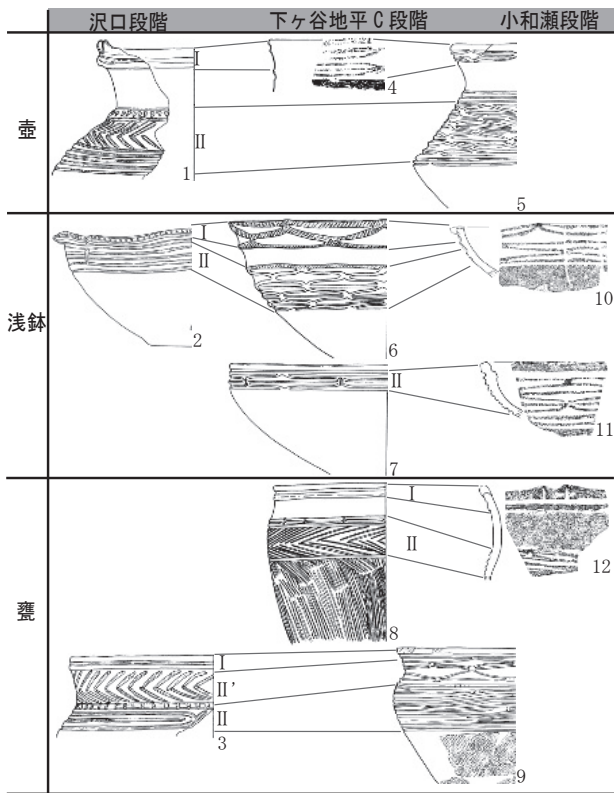
他の代表的な資料 喜多方市金山町遺跡（古川ほか編 1986）の土器が沢口遺跡の土器と同段階の土器である（石川1991）。

3-3-2. 下谷ヶ地平C段階

設定方法 下谷ヶ地平C遺跡SI01出土土器（芳賀・藤谷編 1986；図13-1～31）を基準資料とする。こ

の住居は、確認面から床面までが約20cmと薄いのが、石囲炉と10本の柱穴をもち、床面が固く踏みしめられていたことが報告されている。この覆土から大量の土器が出土しており、少数の大木式土器や大洞BC～C₁式の土器、弥生時代前期の土器を除いたほとんどが、縄文時代晩期後半の特徴をもち、良好なまとまりといえる。

器種 下ヶ谷地平C段階の土器は、壺・浅鉢・鉢・



1-3 沢口遺跡 4・6-8 下ヶ谷地平C遺跡
5 荒屋敷遺跡 9-12 小和瀬遺跡

図12 会津地方の文様帯

深鉢・甕で構成される（表1）。沢口段階からの変化は、精製土器の中で壺の占める割合が少なくなり（図13-1～3）、浅鉢が圧倒的に多くなる（図13-4～14）点と、甕が多い点である（図13-17～23・27～31）。これらの点は、館ノ内D段階から青田古段階への変化と共通する。台付浅鉢は少なく、下ヶ谷地平C遺跡に無いが、窪田遺跡SI07（古川編1987）にある（図13-15）。

文様 精製土器の文様は、沢口段階では工字文風の文様であったが、本段階では沈線ではなく面的な彫去になり、浮線文へ変化する。この点で、青田古段階と類似するが、浮線文のモチーフ（図14）は少ない⁵⁾。モチーフはA・D類が中心で、B・C・E類は少なく、楕円形の補助文様もほとんど使われないため、単純なモチーフが多い。

半精製の甕には、「く」の字状の矢羽状沈線文がまれに施文されており（図13-23）、下越地方と共通するが、壺や浅鉢に矢羽状沈線文が多い東北地方中部と異なる。

半精製・粗製土器の地紋では、甕と深鉢で共通して細密条痕が多く（図13-23・25・26・28）、縄文は青田古段階と比べて少ない（図13-24・27）。結節縄文や撚糸文、網目状撚糸文はまったくみられない。粗製土器の口縁部装飾は、肥厚口縁が多く（図13-25～

28）、突起（図13-19）や平行沈線（図13-17）が少数ある。

文様帯 壺は口縁部文様帯（I）を持つが（図12-4）、胴部以下が残る資料が少なく、胴部文様帯（II）の有無は不明である。下ヶ谷地平C段階から小和瀬段階（後述）にあたる荒屋敷遺跡では完形土器があり、胴部文様帯（II）が存続するとわかる（図12-5）。

浅鉢は口縁部文様帯（I）と胴部文様帯（II）がある（図12-6）が、頸部文様帯（IIc）はなく、口縁部文様帯（I）がない個体もある（図12-7）。甕は口縁部文様帯（I）と胴部文様帯（II）がみられる（図12-8）。II'文様帯の有無は不明だが、下ヶ谷地平C段階から小和瀬段階（後述）にあたる土器にはII'文様帯をもつ土器がある（図12-9）。

他地域との併行関係 青田古段階と器種組成が同じであり、浮線文の出現期という点も共通する。したがって、下ヶ谷地平C段階は青田古段階と併行する。

他の代表的な資料 会津地方で下ヶ谷地平C段階と同様の内容をもつ土器群に、窪田遺跡SI07（古川編1987）出土土器がある。

3-3-3. 小和瀬段階

設定方法 小和瀬遺跡SI01・SK04出土土器（吉野編2022）を標識とする土器群である（図15-1～27）。

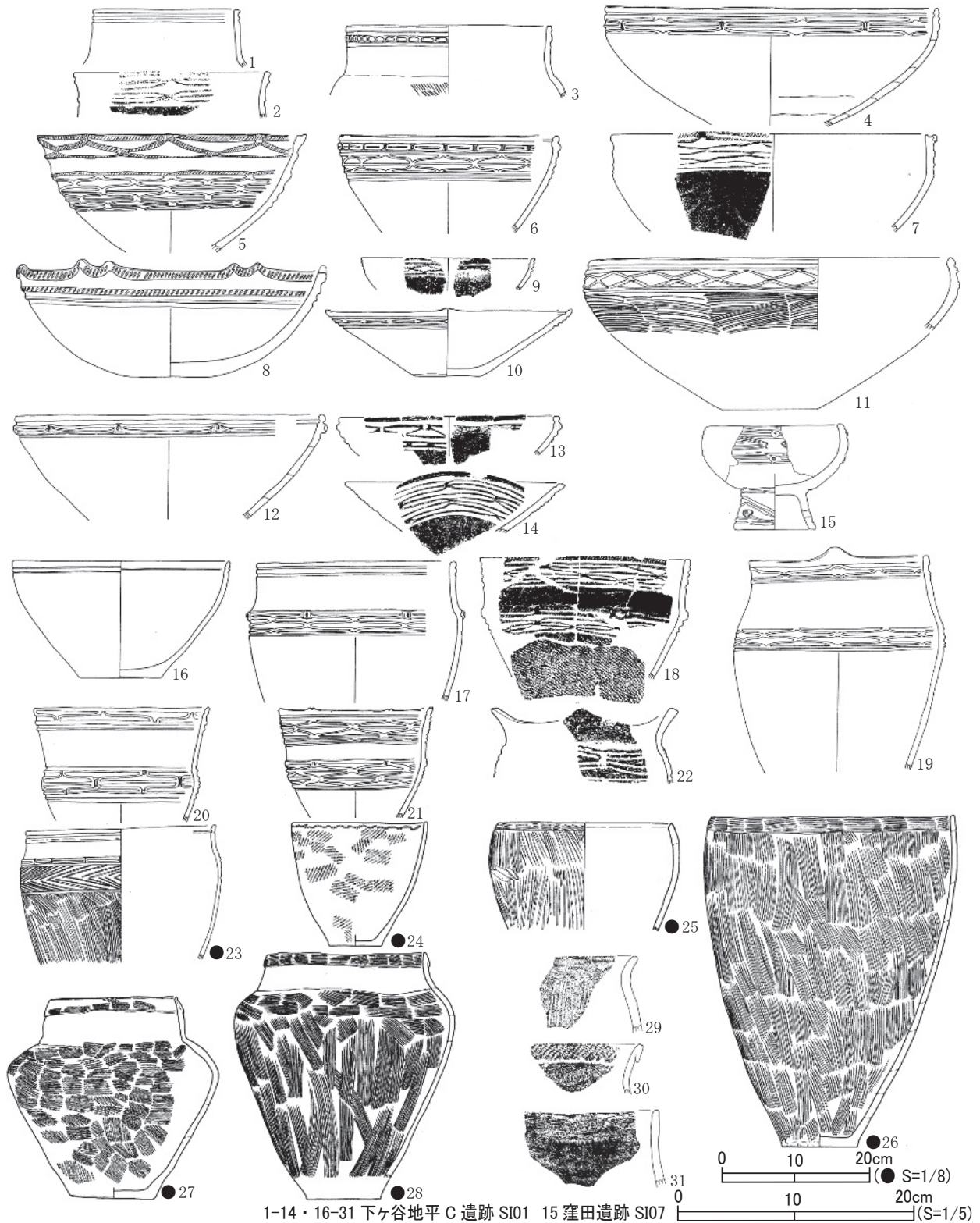
SI01は、残存長3.7mの円形の竪穴建物で、確認面から床面までが約15cmと薄いが、石囲炉と柱穴をもつ。SK04は長幅3m、深さ30cmの土坑であり、炭化物が混ざる堆積土である。これらの遺構の覆土から出土した土器は、青田新段階と共通する特徴をもつ土器の良好なまとまりである。

器種 下ヶ谷地平C段階から変化はなく、壺・浅鉢・鉢・深鉢・甕で構成される。ただし、下ヶ谷地平C段階から小和瀬段階の土器が主体となる荒屋敷遺跡では注口土器が出土しており（図15-29）、一部の遺跡では注口土器が組成する。

文様 小和瀬段階の精製土器の文様は、下ヶ谷地平C段階と同様のモチーフの浮線文が多い。一方、下越地方で青田新段階のみに施文されたA7類が出現し（図14）、交点部の点刻（図15-7・20・21）が多用される。

半精製の深鉢や特殊壺には、「く」の字状の矢羽状沈線文がまれに施文される（図15-15・17）。

半精製・粗製土器の地紋では、甕と深鉢で共通して細密条痕が多く（図15-12・15・16・27）、縄文は青田新段階と比べて少ない。結節縄文や撚糸文、網目状撚糸文も少ない。粗製土器の口縁部装飾は、肥厚口縁



1-14・16-31 下ヶ谷地平C 遺跡 SI01 15 窪田遺跡 SI07

図13 下ヶ谷地平C段階の土器

が多く（図15-12・16）、突起（図15-27）や平行沈線（図15-13・14）が少数ある。

文様帯 小和瀬段階の文様帯は下ヶ谷地平C段階から変化はない。壺の文様帯は不明であるが、下ヶ谷地平C段階から小和瀬段階にあたる荒屋敷遺跡ではⅠ・Ⅱ文様帯が存続するため（図12-5）、小和瀬段階に

も2つの文様帯が存在すると推定できる。浅鉢は、口縁部文様帯（Ⅰ）と胴部文様帯（Ⅱ）をもつもの（図12-10）と、胴部文様帯（Ⅱ）のみもつ土器がある（図12-11）。甕は口縁部文様帯（Ⅰ）と胴部文様帯（Ⅱ）があり（図12-12）、Ⅱ'文様帯の有無は不明である。他地域との併行関係 器種組成と精製土器の文様、

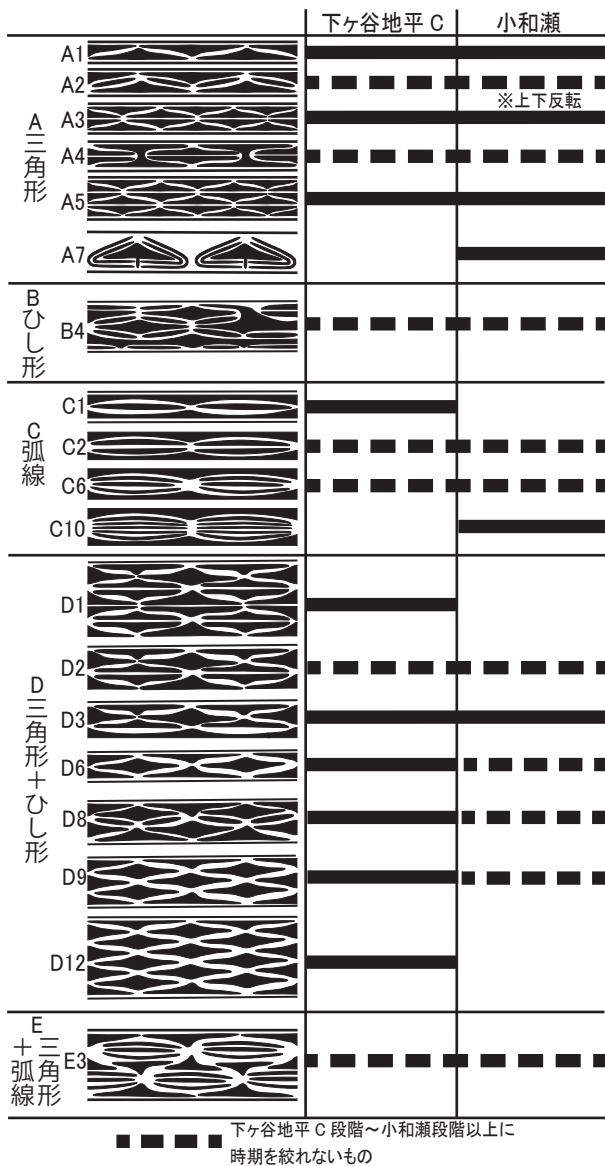


図14 会津地方の浅鉢浮線文モチーフ

文様帯の構成が青田新段階とほとんど同じであり、浮線文のモチーフのうち、A7や交点部の点刻を共有することから(図15-6・21)、同時期と考えられる。

他の代表的な資料 小和瀬段階のみが出土した遺跡・遺構はほとんどない。三島町荒屋敷遺跡(小柴編1990)出土土器は、下ヶ谷地平C段階と小和瀬段階を

多く含む。

3-3-4. 先行研究との比較

基本的には石川(1991)の編年と整合的である。下ヶ谷地平C段階に後続する資料は、当時は会津地方で良好な資料が未発見であったが、小和瀬遺跡の資料で空白を埋めることができた。この編年は中村(1988)ともおおむね共通するが、中村が言及した袋原遺跡と銭森遺跡の資料は下ヶ谷地平C段階か小和瀬段階か判断するのが難しい(表3)。

3-4. 中通り・浜通り地方

3-4-1. 連郷B段階

設定方法 連郷B遺跡A地点出土土器(木幡ほか編2000)を基準資料とする。この遺跡は縄文時代後期の遺構が多いが、A地点の包含層からは、縄文時代晩期後葉と考えられる土器が、ごく少数の縄文時代晩期前葉、弥生時代中期前葉から中葉の土器を交えて出土している。遺構が無い上に層位的な検討ができないが、空間的にまとまった資料であると判断できる。

器種 連郷B段階の土器は、壺・浅鉢・鉢・注口・深鉢・甕で構成される。精製土器の主体が浅鉢である点は館ノ内D段階や沢口段階と共通するが、壺が少ない点(図16-1・2)や注口土器がある(図16-12・13)点が特異である(表1)。

文様 精製土器の文様は、沈線を用いて工字文風の文様を施文する土器が多い(図16-3・12)。沈線に磨消縄文を組み合わせることもある(図16-4・7・8・13)。モチーフは楕円が入り組んだ図形が多く(図16-3・7)、東北地方中部以北の工字文と異なる。

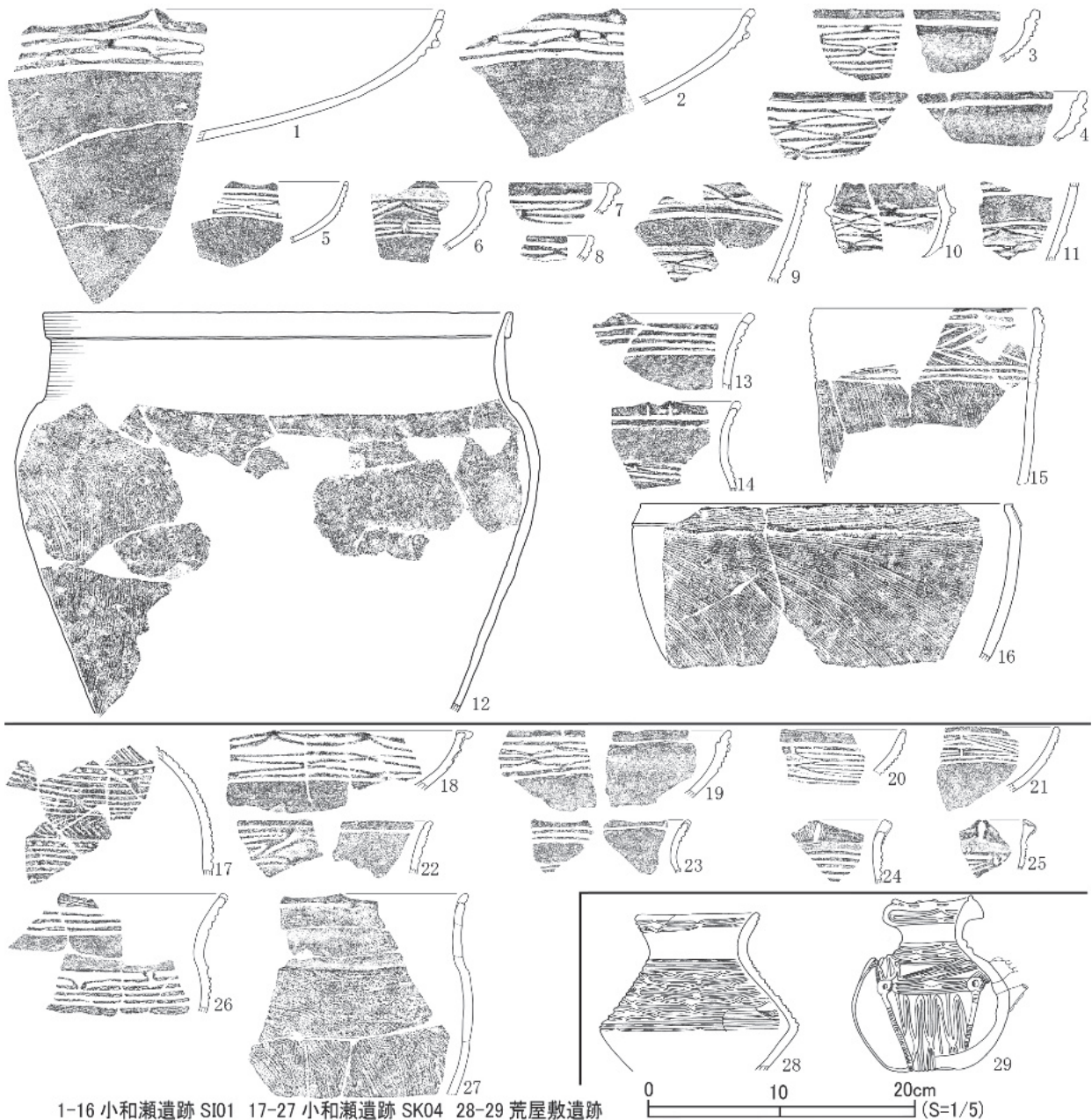
粗製土器の地紋は縄文が多い(図16-22・24)が、条痕や(図16-23)。網目状撚糸文(図16-27・28)もある。粗製土器の口縁部装飾は、肥厚口縁(図16-18・19)や突起(図16-21)や平行沈線(図16-14)が少数ある。

文様帯 精製の壺がほとんどなく、壺の文様帯は不明であるが、周辺地域や後続する羽白C段階(後述)

表3 福島県域の段階と先行研究

下越	本稿		大坂(2012)		中村(1988)		石川(1991)	大坂(2012)
	会津	中通り・浜通り	東南北部	会津	中通り・浜通り	山形・宮城		
-	-	-	-	沢口	-	(+)	-	
館ノ内D	沢口	連郷B	鳥屋1	-	-	沢口・金山	(+)	
青田(古)	下ヶ谷地平C	羽白C	鳥屋2a	下ヶ谷地平C	四十内	下ヶ谷地平C	砂子田	
青田(新)	小和瀬	作B(古)	鳥屋2b	袋原・銭森	道平・岩下A	(+)	北柳I	
			滝ノ口					

※網掛けは弥生時代前期



1-16 小和瀬遺跡 SI01 17-27 小和瀬遺跡 SK04 28-29 荒屋敷遺跡

図15 小和瀬段階の土器

と同様であれば、口縁部文様帯（Ⅰ）と胴部文様帯（Ⅱ）で構成される。浅鉢は口縁部文様帯（Ⅰ）と胴部文様帯（Ⅱ）で構成される（図17-1）が、頸部文様帯（Ⅱc）はみられない。一部ではⅠ・Ⅱ・Ⅱc文様帯に加えて、Ⅱ文様帯が2段になり、器面全体が文様帯となる特殊な例がある（図16-8）。これを鈴木（2003）は「銭森系列」と呼び、関根（2021）は胴部下部の矢羽状沈線文が施文された文様帯をz文様帯と呼ぶ。甕は口縁部文様帯（Ⅰ）と胴部文様帯（Ⅱ）がみられるが、頸部にⅡ'文様帯をもち、矢羽状沈線文を施文した土器もある（図17-2）。

他地域との併行関係 工字文風の文様（図16-4・12）がみられる点から、館ノ内D段階や沢口段階と並

行すると考えられる。一方で、浮線文のモチーフのうち、A1類とA2類（図14）が上下に結合した文様（図16-10）や、半精製の甕（図16-16）がみられる点から、青田古段階と下ヶ谷地平C段階とも併行すると考えられる。（表3）。

他の代表的な資料 この段階の土器がまとめて出土した例は他にない。羽白C遺跡（鈴鹿ほか編1988；鈴鹿ほか編1989）の包含層に連郷B段階と思われる土器があるが、断片的である。

3-4-2. 羽白C段階

羽白C段階は、羽白C遺跡包含層出土土器の内、ヌ15グリッド出土土器（図18-1～38）を基準資料と

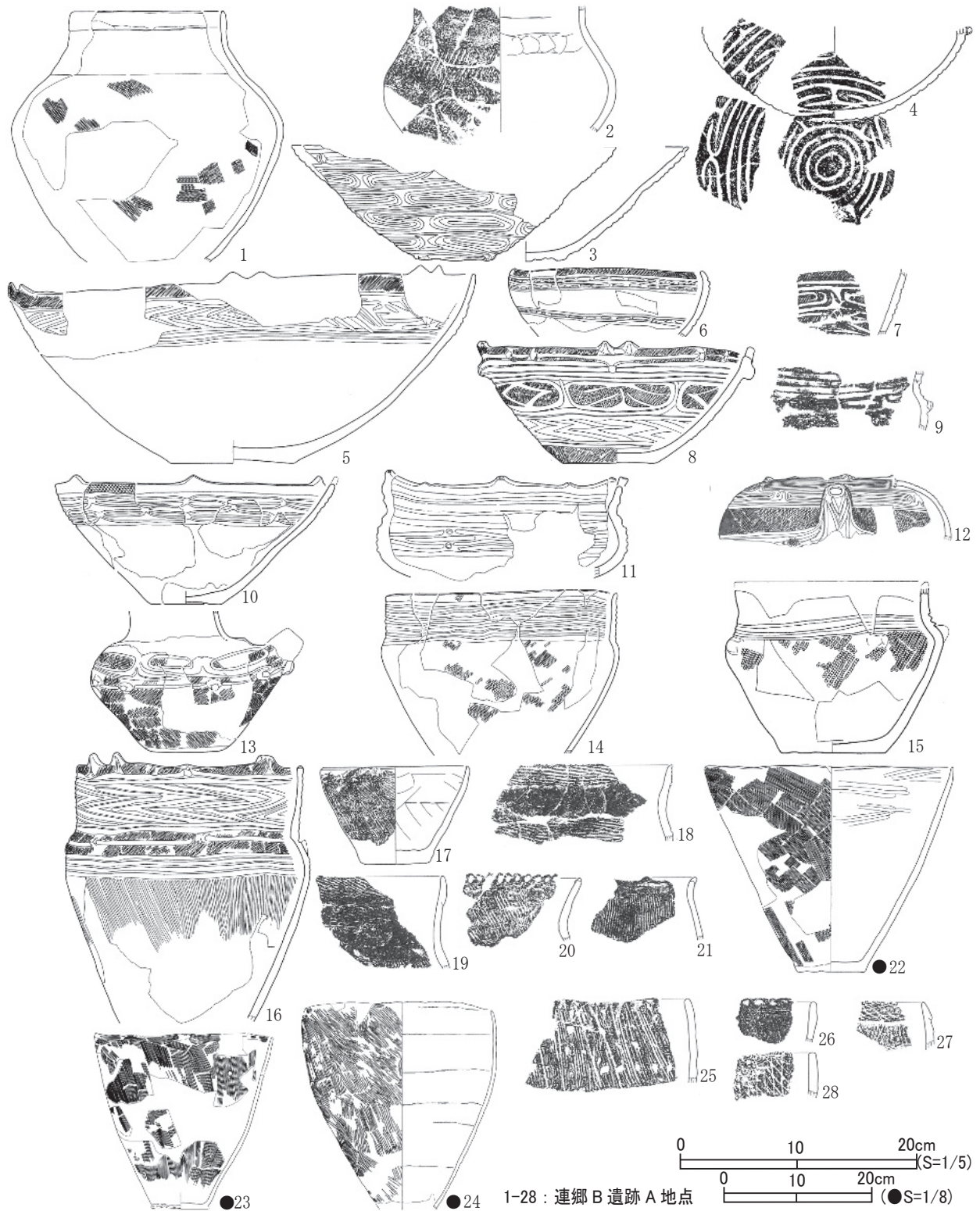


図16 連郷B段階の土器

する。

この遺跡では、包含層の層位ごとの出土状況が良好でない上、遺物の水平分布にパターンを見出しがたいが、ル14グリッドに縄文時代晩期中葉の土器が多く、やや南のヌ15グリッドに、少量の晩期前葉から中葉の土器とともに、晩期後葉の遺物が密集する。

器種 羽白C段階の土器は、壺・浅鉢・鉢・台付鉢・深鉢・甕で構成される。精製土器の主体が浅鉢であり、壺が少ない点で山形県・宮城県南部（4章で詳述）と共通するが、甕がある点では会津地方や下越地方と共通する（表1）。

文様 精製土器の文様は、沈線で三角形とその間の

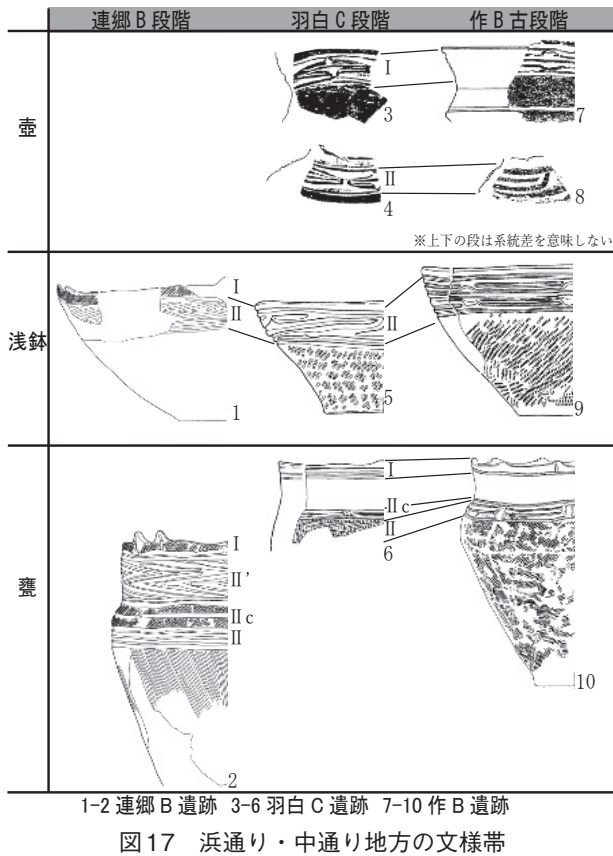


図17 浜通り・中通り地方の文様帯

斜線（補助文様）を施文し、特殊工字文（大坂2009；高橋1993）を描く土器が多い（図18-10～18）。また、三角形が組み合う工字文（図18-24）や背中合わせになるπ字文（図18-22）もある。浮線文C（図7・図14）類もわずかにあり（図18-5・6・7）、ヌ15グリッド以外にはA類もある。

半精製・粗製土器は、下越地方や会津地方と共通点が多い。半精製土器は甕が少数あり、矢羽状沈線文が施文される（図18-28）。

半精製・粗製土器の地紋は、甕と深鉢で共通して荒い条痕（図18-31・32）と細密条痕（図18-34）と縄文（図18-30・38）がある。結節縄文や網目状撚糸文はまれである（図18-33・37）。粗製土器の口縁部装飾は、肥厚口縁が多く（図18-35・36）、突起（図18-33）が少数みられる。

文様帯 壺は口縁部文様帯（I）と胴部文様帯（II）をもつ（図17-3・4）。浅鉢は連郷B段階にあった口縁部文様帯（I）がなくなり、胴部文様帯（II）のみになる（図17-5）。甕は口縁部文様帯（I）と胴部文様帯（II）がある（図17-6）が、頸部無文帯にII'文様帯をもつ土器がみられない。この原因は羽白C段階を設定するのに使用できた土器数が少ないためであり、他の遺跡にII'文様帯をもつ土器が無いと言い切れない。

他地域との併行関係 羽白C段階の土器を下越地方の土器と直接対比することは難しい。特殊工字文が施文される土器（図18-12など）から、東北地方中部の砂子田段階（大坂2009, 2012）と併行すると考えられる。また、図18-20の胴部文様は、九年橋17号焼土段階から10号土坑段階（小久保2023）に多い台付浅鉢の文様である。これらの段階は、3-2-2で青田古段階と併行することを確認しているため、羽白C段階も青田古段階と併行すると考えられる（表3）。

他の代表的な資料 羽白C段階の土器がまとまって出土した例は少なく、岩下A遺跡（松本ほか編1980）の包含層に羽白C段階と思われる土器があるが、断片的である。

3-4-3. 作B古段階

作B遺跡出土土器のうち、岩下D遺跡（目黒ほか編1986；図20）の土器と共通する型式内容を持つ土器を作B新段階として除外し、残る土器を作B古段階（図19-1～36）と定義する。

器種 作B古段階の土器は、壺・浅鉢・台付浅鉢・鉢・深鉢・甕で構成される。精製土器の主体が浅鉢であり、壺が少ない点で山形県・宮城県南部（4章で詳述）と共通するが、甕がある点では下越地方や会津地方と共通する（表1）。

文様 作B段階の文様は羽白C段階と同様で、山形県・宮城県南部と共通する。精製土器の文様は、沈線で三角形とその間の斜線（補助文様）を施文しており、いわゆる特殊工字文（大坂2009；高橋1993）を描く（図19-8～10）。また、三角形が背中合わせになるπ字文（図19-18）もある。浮線文はわずかにあり、下越地方や会津地方の分類でいうA類（図14）がある（図19-11～12）が、彫去部分がゆがんでおり、下越地方や会津地方ほど均質でない。

半精製・粗製土器は下越地方や会津地方と共通する。半精製の土器は、わずかに甕がみられ、凸字の工字文（高瀬2000）や矢羽状沈線文が施文される（図19-23・28・29）。図19-28の矢羽状沈線文は、小久保（2023）でいうB類である。

半精製・粗製土器の地紋は下越地方や会津地方との共通点が多い。甕と深鉢で共通して細密条痕（図19-24・32・35）と縄文（図19-23・25～27）がある。羽白C段階にみられた荒い条痕はない。結節縄文はみられず、ごくまれに網目状撚糸文もみられるが（図19-36）、細片しか出土しない。粗製土器の口縁部装飾は、肥厚口縁が多くみられ（図19-35・36）、突起（図19-25・26）や平行沈線（図19-34）が少数ある。

文様帯 文様帯の構成は、羽白C段階からまったく

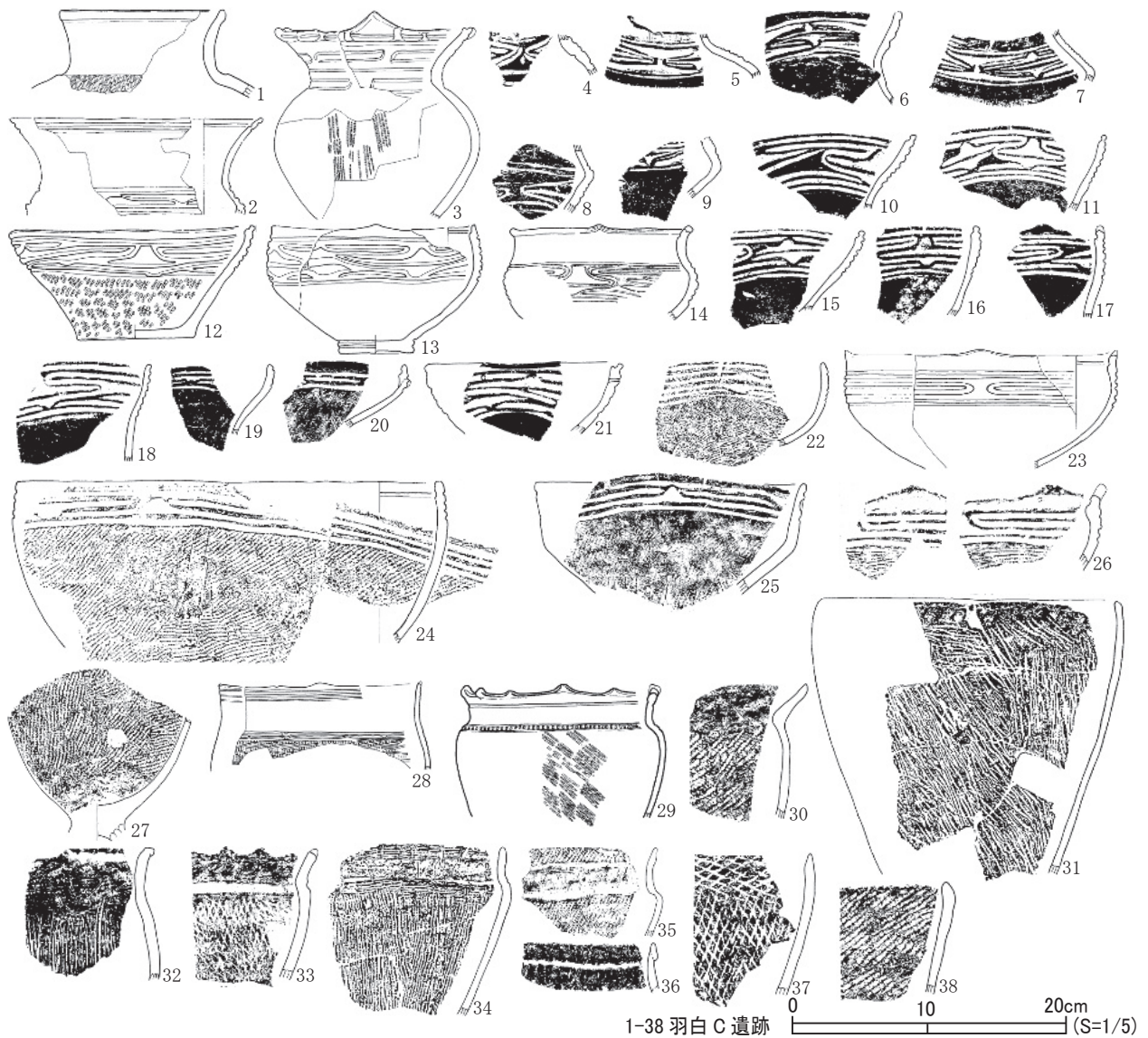


図18 羽白C段階の土器

変化しない。壺は口縁部文様帯（Ⅰ）と胴部文様帯（Ⅱ）をもつ（図17-7・8）。浅鉢は胴部文様帯（Ⅱ）のみで構成される（図17-9）。甕は口縁部文様帯（Ⅰ）と胴部文様帯（Ⅱ）がある（図17-10）が、頸部の無文帯にⅡ'文様帯をもつ土器がなく、文様の転移がみられるかは不明である。

他地域との併行関係 浮線文がみられる（図19-11～12）ため、青田古段階から新段階のいずれかに併行する。特殊工字文が施文される土器（図19-8・9など）の口縁部がつよく外反するため、北柳Ⅰ段階（大坂2009, 2012）と併行すると考えられる。北柳Ⅰ段階は、青田新段階と併行することを3-2-3で確認しているため、作B古段階も青田新段階と併行すると考えられる（表3）。

他の代表的な資料 作B古段階の一括資料には、福島市大平・後関遺跡SK63やSK14（植村ほか編1997；

堀江・引地編2004）がある。

3-4-4. 先行研究との比較

大坂（2012）が弥生前期とした「滝ノ口式」は、基準となる滝ノ口遺跡SI01検出面の土器が縄文時代晩期後葉から弥生時代前期までの土器が混ざるものであり、編年の基準資料として扱えない（小久保・富高2025）。大坂が示した資料には、本稿でいう作B古段階と作B新段階が両方含まれる。中村（1988）の「道平・岩下A」は、本稿でいう作B新段階に該当する（表3）。

4. 東北地方南部の土器型式圏

4-1. 「特殊工字文土器群」の概念整理

「特殊工字文土器群」は、大坂（2009, 2012）が提唱した概念であり、山形県域から宮城県域において、い

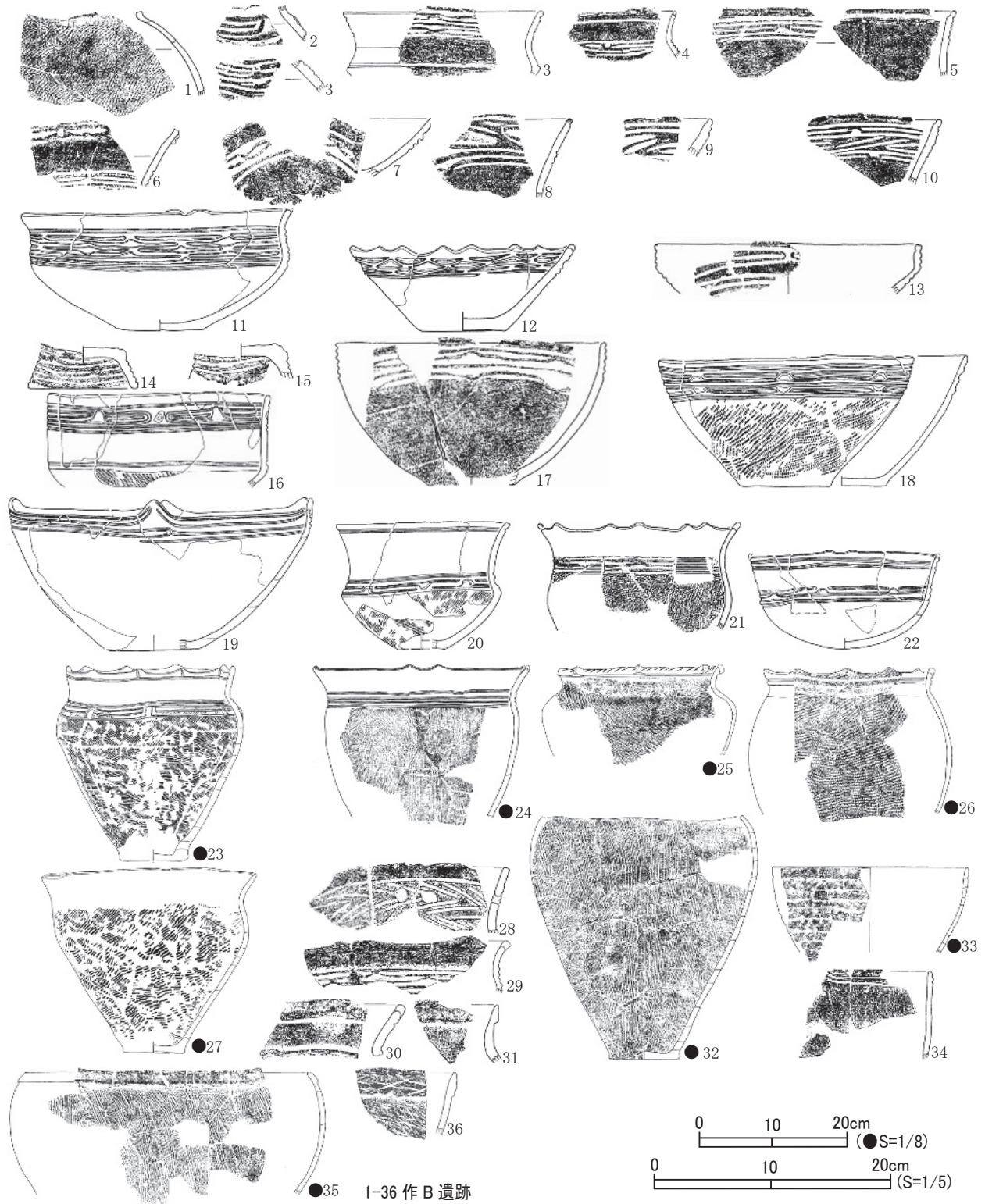


図19 作B段階の土器

いわゆる「変形匹字文」(鈴木^正1987)や変形工字文B(工藤1987)が弥生時代前期以降も多用されることに注目して設定された。

大坂(同上)は、砂子田遺跡と北柳I遺跡の土器(小林・大泉編1997;森谷ほか編2000;森谷ほか編2003)を用いて「南部型丸底鉢」の文様と器形が対応するこ

とを示し、「特殊工字文土器群」を砂子田段階、北柳I段階、北柳II段階の3段階に細分した。これらの「段階」は、設定方法の類似から、3章の青田古段階や連郷B段階などの「段階」と同様の概念と考えられる。大坂(同上)は、浅鉢以外について詳述していないが、各段階を単純遺跡と遺物集中ブロックを基準に設定し

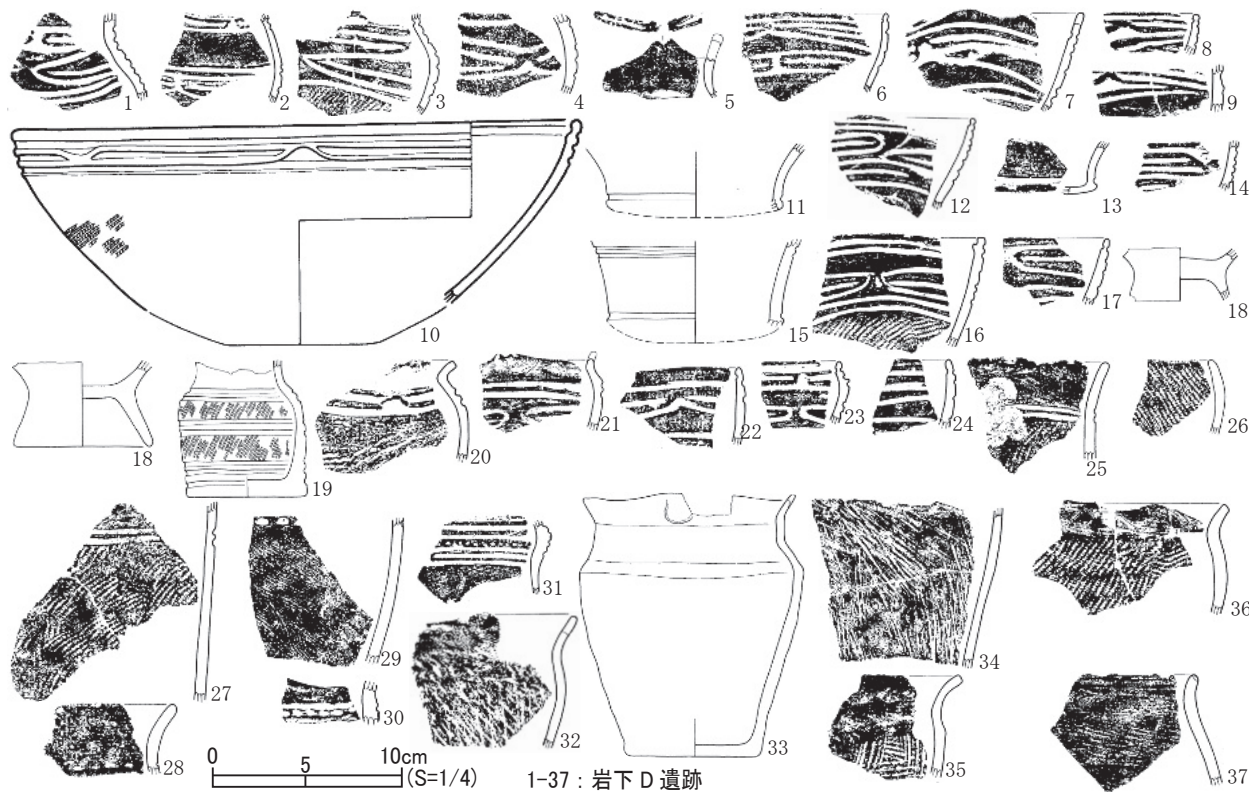


図20 岩下D遺跡の土器

ており、器種と文様・文様帯がわかる（図21；表1）。

砂子田段階は、精製土器が少数の壺と多数の浅鉢で構成され、これに台付浅鉢や鉢が伴う。粗製土器は深鉢のみで、甕はみられない。精製土器の文様はπ字文や特殊工字文が施文される。粗製土器の地紋は縄文である。

北柳I段階も、精製土器は少数の壺と多数の浅鉢で構成され、これに台付浅鉢や鉢が伴う。粗製土器は深鉢のみで、甕はみられない。精製土器の文様は凸字文や特殊工字文が施文される。粗製土器の地紋は縄文である。

以上のように、砂子田段階と北柳I段階は精製の浅鉢だけではなく、複数の器種と特定の文様を特徴とする土器の一群であり、設定方法だけでなく実態からも、3章で設定してきた段階と同様の概念として操作できる。

4-2. 釜淵C段階の設定

山形盆地における縄文時代晩期後葉の土器に、山形県真室川町釜淵C遺跡C区の土器の一部を挙げる事ができる。大坂（同上）は砂子田段階以前の土器について述べておらず、館ノ内D段階や連郷B段階に併行する土器を設定していないため、補足する。

釜淵C遺跡C区では包含層から縄文時代晩期前葉から後葉の土器が多数出土しており、調査区の南側は

ど、時期が新しい（黒坂・豊野編 2003：34頁）。したがって、包含層南部（21-40、21-41、21-42、22-39、22-40、22-41、22-42グリッド）から出土した資料を基準資料とする（図22-1～16）。

器種 壺・注口・浅鉢・台付浅鉢・鉢・深鉢で構成される。精製土器の主体は壺と台付浅鉢である。粗製土器は深鉢であり、甕は全く見られない。九年橋18号土坑段階（小久保2023）と共通の土器組成である。

文様 土器の文様は、九年橋18号土坑段階とほぼ同一である。精製土器は、壺・台付浅鉢の体部にはいわゆる流水状の工字文（図22-2～4）や三角形が組み合う工字文（図22-5～10）が施文される。粗製土器の地紋は単節LR縄文のみであり、条痕文や燃糸文はみられない。

他地域との併行関係 釜淵C段階には、平行沈線の一部を上下に三角形に彫去して、左右に間延びした工字文風の文様がみられる（図22-13）。この文様は館ノ内D段階や沢口段階にみられる文様であり、釜淵段階はこれらの段階と併行する。また、器種と文様の共通性から、九年橋10号土坑段階とも併行すると分かる。

4-3. 「型式」と「段階」の整理

3章で設定した「段階」は、これまで「鳥屋1a式」、「大洞A₂式」などの細別型式と同様の概念であり、そ

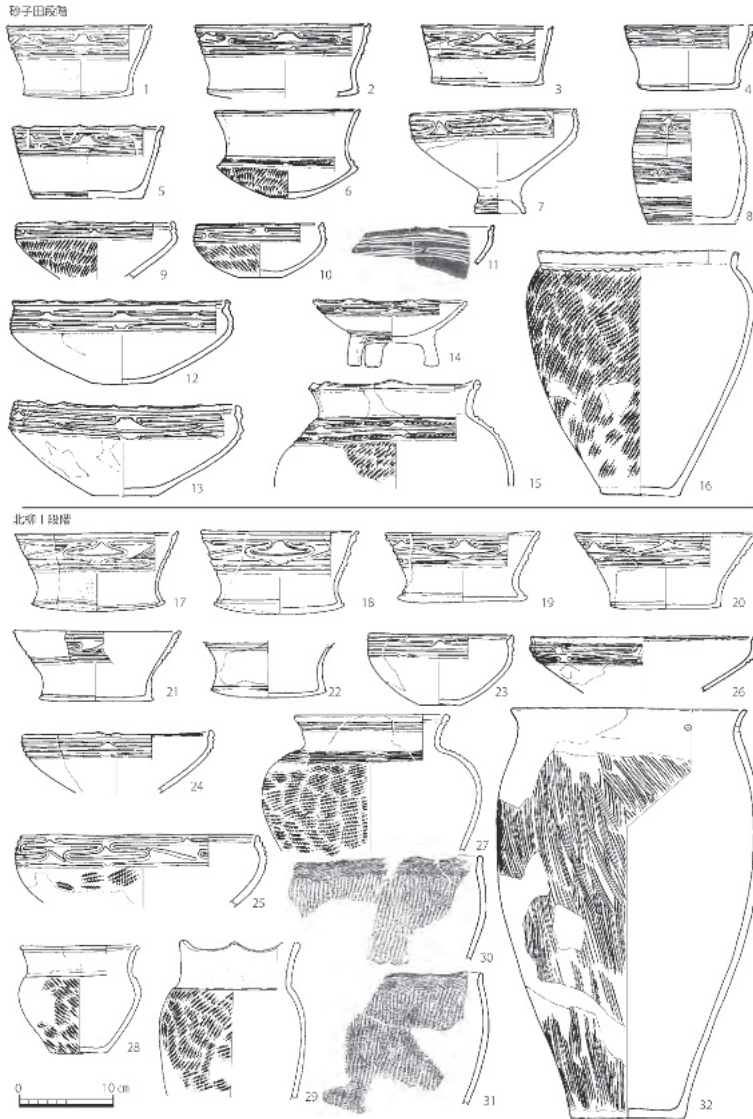


図21 「特殊工字文土器群」の標式資料 (大坂2012)

の上位概念が「鳥屋1式」、「大洞A式」などの「型式」である。

縄文時代晩期の土器は、山内(1930)以来、多くの細分がなされてきたが、ほとんどの論文で重視されてきたのは、器種(特に精製土器の器種)と精製土器の文様、文様帯の3つである。例えば、大洞C₂式土器は壺によって細分され(高橋1993など)、大洞A・A'式土器は文様によって細分されてきた(工藤1987; 鈴木1987など)。大洞A'式は、I文様帯とII文様帯の合体がもっとも重要な特徴とされた(山内同上)。つまり、これら3つの特徴の中に画期がある場合、別の型式名が用意され(例:鳥屋1式と鳥屋2式)、3つをおおむね共有する中に時期的な差異がある場合、細分型式が設定されてきた(例:鳥屋2a式と鳥屋2b式)。

したがって、3章で述べた各段階とこれまで設定

されてきた型式の関係を整理すると図23のようになる。館ノ内D段階と沢口段階は、鳥屋1式である。両段階は器種組成がほぼ同じであり、甕がわずかにみられる。精製土器の主体は壺と浅鉢である。精製土器の文様は左右に間延びした工字文風の文様を共有する。文様帯の構成は、基本的にはIとIIで構成される。こうした特徴は、石川(1988)が設定した鳥屋1式にみられるものである。

青田古段階と青田新段階、下ヶ谷地平C段階、小和瀬段階は鳥屋2式である。わずかな台付鉢の有無以外は、各段階の器種組成は共通しており、甕が本格的に組成する。精製土器の主体は浅鉢であり、浮線網状文を共有する。文様帯の構成は、特殊なII'文様帯を除けば、基本的にはIとIIで構成されるが浅鉢はIIのみの場合が多い。こうした特徴は、石川(1988)が設定した鳥屋2式にみられる。

連郷B段階は特殊であり、器種組成は釜淵C段階や九年橋18号土坑段階と類似するが、壺が精製土器の主体とならず、甕が組成する。精製土器の文様と文様帯の構成は沢口段階に類似している。したがって、連郷B段階は未命名の型式の一部と考えられる。

羽白C段階と作B古段階、砂子田段階、北柳I段階は、特殊工字文土器群である。器種は精製土器で壺が少なく、浅鉢が主体であり、深鉢が伴う。精製土器の文様

は、特殊工字文が多く、三角形が背中合わせになるπ字文もある。文様帯はIとIIで構成されるが、浅鉢はIIのみのものが多い。こうした特徴は、特殊工字文土器群(大坂2012)に当たる。

釜淵C段階は、九年橋18号土坑段階(小久保2023)などとともに、大洞A式を構成する。壺と台付浅鉢が精製土器の主体であり、これに注口土器や深鉢が伴う。精製土器には工字文が施文され、文様帯はIとIIで構成される。こうした特徴は、山内(1930)が設定した大洞A式にみられる。

ここで、各段階を地域的に横断したフェーズ名をつける。広く使われている大洞式土器の名称を用い、館ノ内D段階に併行するフェーズを「大洞A₁式併行期」、青田古段階に併行するフェーズを「大洞A₂式併行期」、青田新段階に併行するフェーズを「大洞A'式併行期」と呼ぶ。ただし、青田新段階は九年橋10号土坑段階

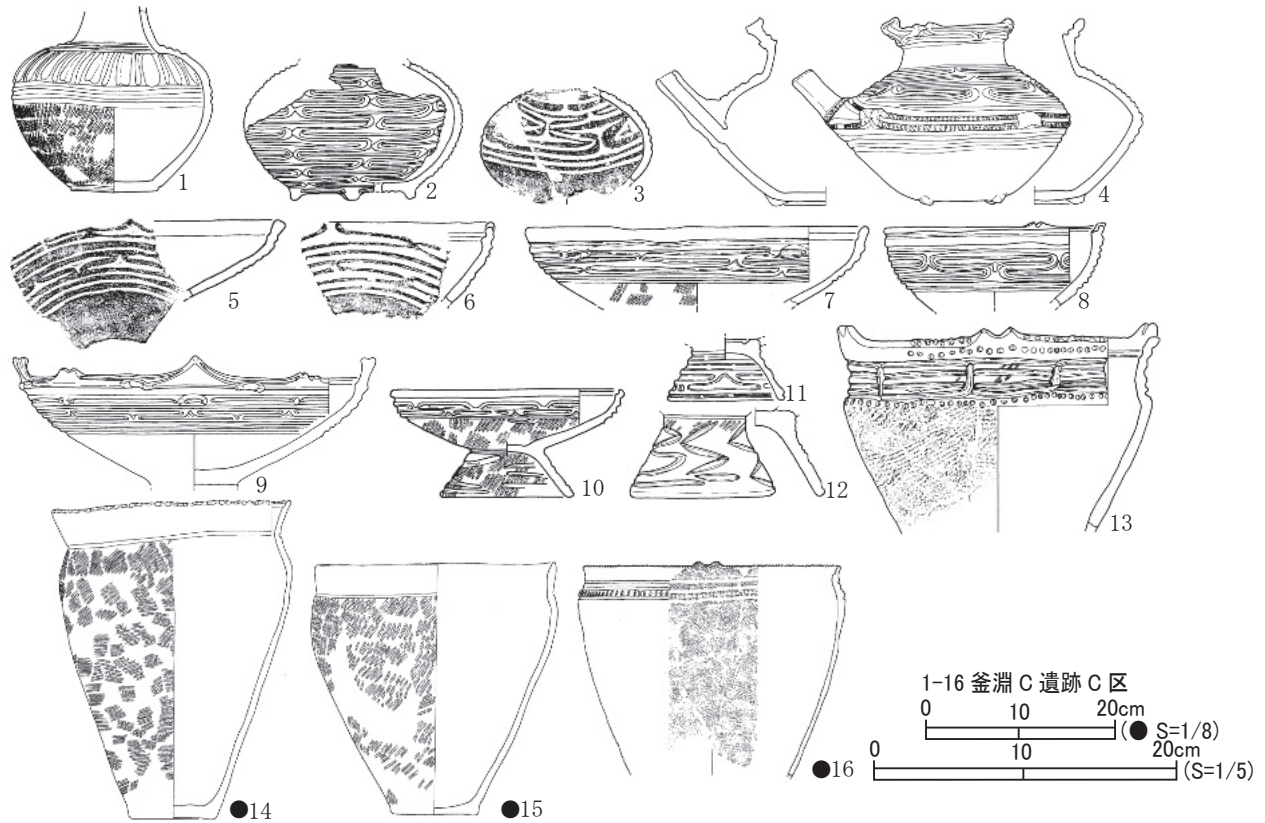


図22 釜淵C段階の土器

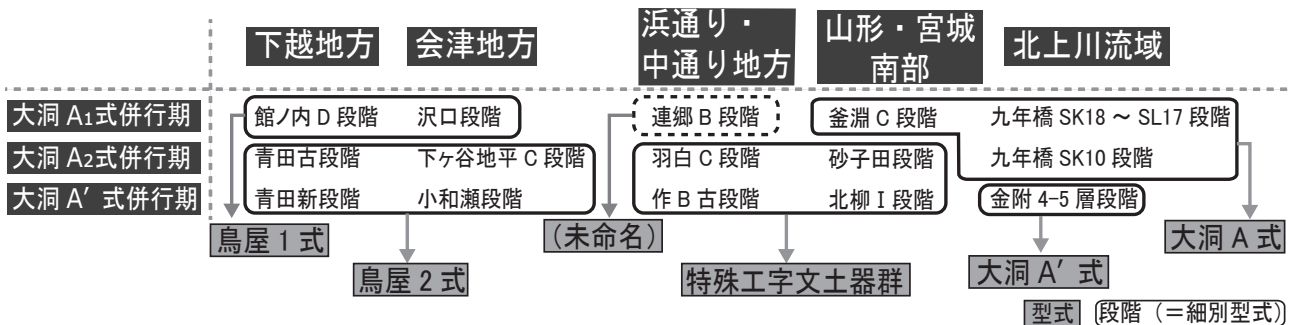


図23 段階と型式の関係

から金附下層段階に併行するように、広域編年を行っている都合上、各フェーズは地域によっては必ずしも背反ではない。

このように、3章で設定した各段階は、先行研究の鳥屋1式、鳥屋2式、特殊工字文土器群、大洞A式を細分するものである。

4-4. 浮線文と特殊工字文の分布

3章で設定した時空間軸を用いて、2章で導き出した問題意識の内、①「特殊工字文土器群」が福島県域にも分布する可能性はないのかを検討する。この問いは4-3を踏まえれば、「鳥屋2式」と「特殊工字文土器群」の境界はどこにあるのかと言い換えられる。

この2つの型式の境界が曖昧であった原因は、両者の精製土器を構成する器種が同じであることと、先行する連郷B段階の土器型式が不明瞭であるからである。

「鳥屋2式」と「特殊工字文土器群」のもっとも大きな違いは、精製土器の文様である。そこで、大洞A₂～A'式期における浮線文と特殊工字文の分布を確認する(図24)。

下越地方(青田古段階・青田新段階)では、浮線文が主体となる遺跡がほとんどであり、特殊工字文はほとんどみられない。この傾向は、同じ鳥屋2式が分布する会津地方(下ヶ谷地平C段階・小和瀬段階)でも同様である。ただし、荒屋敷遺跡は特異であり、特殊工字文が12個体確認されている。この遺跡は東北地

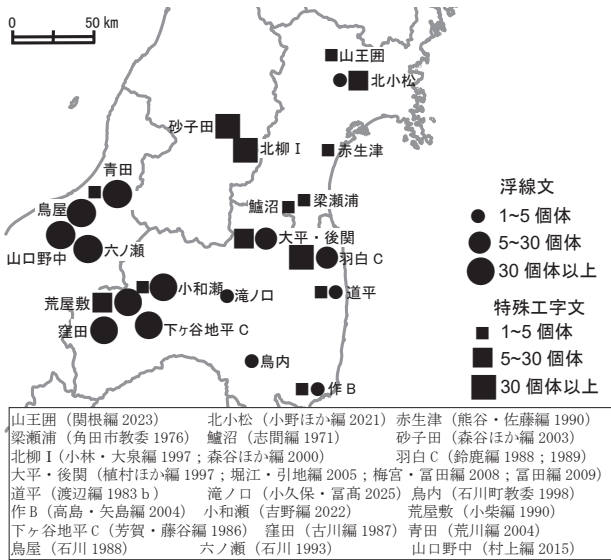


図24 大洞A₂~A'式併行期の浮線文と特殊工字文

方中部以北からの搬入と考えられる土器が多く、弥生時代前期には遠賀川式土器もみられ、周辺の遺跡よりも他地域とのネットワークが強かった可能性がある。

山形県・宮城県では特殊工字文が浅鉢の文様の主体であり、ほとんど浮線文は見られない。砂子田遺跡や北柳 I 遺跡では特殊工字文が 30 個体以上あり、分布の中心である。宮城県域では、特殊工字文の数が減少する。大崎市北小松遺跡でやや多く、仙台市赤生津遺跡や角田市梁瀬浦遺跡にも特殊工字文がある。

浜通り・中通り地方は、浮線文と特殊工字文が両方みられる遺跡が多い。福島市大平・後関遺跡では特殊工字文が 9 個体と浮線文が 20 個体報告され、飯館村羽白 C 遺跡では、特殊工字文が 30 個体と浮線文が 12 個体確認できる。特殊工字文の南限は作 B 遺跡であり、小片が確認できる (図 19-8・9)。

つまり、浮線文が卓越するのは猪苗代湖周辺以西で、特殊工字文が多くみられるのは福島市・飯館村以北である。この間の地域は、縄文時代晩期後葉以降の遺跡がきわめて少なく、分布が不明瞭である。したがって、浮線文と特殊工字文の分布の境界は猪苗代湖以東にあるとしか言えない。

上記の議論は、浜通り・中通り地方の特殊工字文土器が、東北地方中部からの搬入品であった場合成り立たない。しかし、大平・後関遺跡や羽白 C 遺跡出土土器の胎土の観察から、福島県域の「特殊工字文土器群」は、ほとんどが在地の土器であると分かる。東北地方中部の特殊工字文が施文された浅鉢の胎土は、ほとんど夾雑物がない精製された粘土で作られている。色調は橙褐色～灰褐色であり、焼成も良好で堅緻な土器である⁶⁾。

一方で、羽白 C 遺跡や作 B 遺跡で出土した多くの特

表4 各段階の粗製土器の地紋

地域	段階名/属性	縄文	条痕(粗)	細密条痕	撚糸文	網目状撚糸文
下越地方	館ノ内D	-	◎	-	-	-
	青田古	◎	△	○	△	-
	青田新	◎	-	○	-	-
会津地方	沢口	○	-	○	-	○
	下ヶ谷地平C	○	-	◎	-	-
	小和瀬	○	-	◎	-	-
浜通り・中通り	連郷B	◎	△	○	△	△
	羽白C	◎	△	○	△	△
	作B古	◎	-	○	-	△
山形盆地	釜淵C	◎	-	-	-	-
	砂子田	◎	-	-	-	-
	北柳 I	◎	-	-	-	-

◎：主体を占める ○：多く見られる

△：まれに見られる -：見られない

※館ノ内D段階と沢口段階の甕は個体数がきわめて少ない

殊工字文土器の胎土は、小礫を多く含む粘土である。色調は黒褐色のものが多く、焼成はあまい。こうした胎土の特徴は、福島県域に特徴的な長頸壺や網目状撚糸文が施文された土器と共通しており、特殊工字文が施文された土器も福島県域で作られた土器である。

したがって、浜通り・中通り地方でも特殊工字文土器は製作されていると言え、図 24 で示した分布は妥当であり、猪苗代湖以東に「鳥屋 2 式」と「特殊工字文土器群」の境界がある。

4-5. 粗製土器の地域性

3章で記述した粗製土器の地域性は、4-4で述べた精製土器の文様と異なる (表 1, 表 4)。下越地方と会津地方では、大洞 A₁ 式併行期に甕が少なく、粗製土器の地紋に条痕が使われる点で共通する。この共通性は大洞 A₂ 式併行期以降も引き継がれ、深鉢と甕に縄文と条痕が施文される。これは精製土器の文様と同じ結果である。

一方、浜通り・中通り地方は、精製土器の文様では、山形県・宮城県南部と共通したが、粗製土器は下越地方・会津地方と共通する。連郷 B 段階から作 B 古段階まで、粗製土器には甕が組成し、地紋は縄文と条痕である。一方、山形県・宮城県南部では甕がなく、地紋はすべて縄文である。つまり、浜通り・中通り地方は、粗製土器からは下越地方・会津地方と共通する。粗製土器は、精製土器の文様からみた型式圏とは異なる分布圏を有しており、大洞 A₁~A' 式併行期で一貫して、東北地方中部と南部の間に境界があり、大きな組み換えが起こらなかった (図 26)。

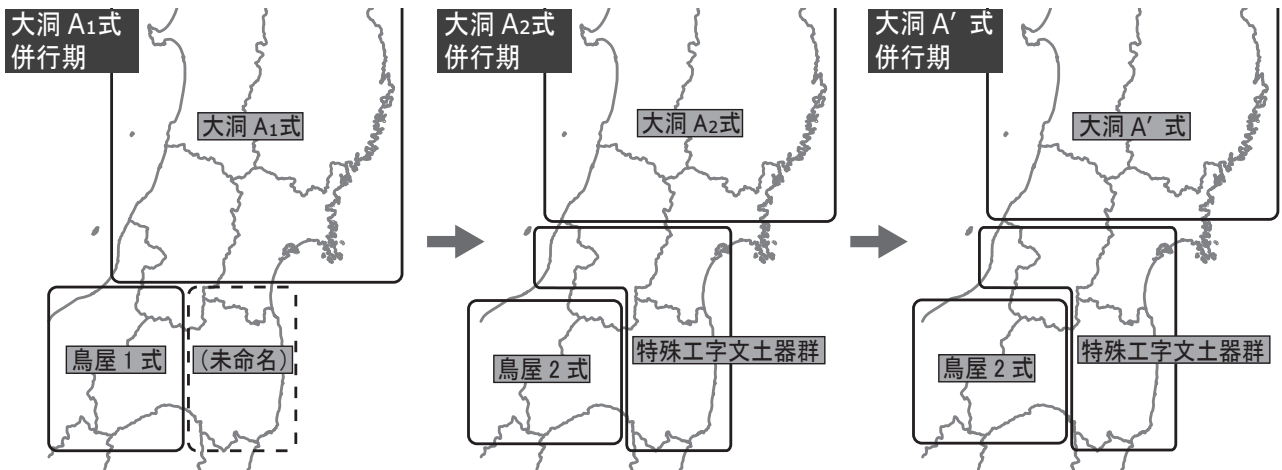


図25 精製土器の文様からみた土器型式圏

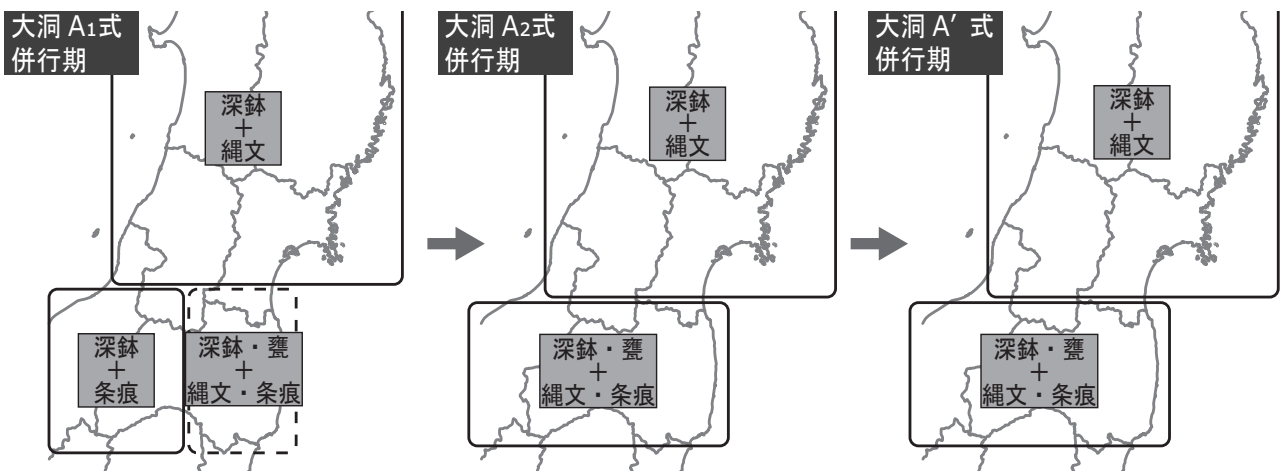


図26 粗製土器からみた土器分布圏

4-6. 東北地方南部土器型式の分布圏

2章の問いの内、②東北地方南部の土器型式の分布圏はどのようなものかを検討する。4-4で明らかにした各土器型式の分布を示すと図25のようになる。大洞 A₁式併行期には、東北地方中部に大洞 A₁式が広がり、東北地方南部には、下越地方や会津地方に鳥屋 1式、浜通り・中通り地方には未命名の型式が分布した。

これが大洞 A₂式併行期になると大きく変化し、東北地方中部には大洞 A₂式がみられるが、山形県南部や宮城県南部が分布から外れる。これらの地域では、新たに特殊工字文が分布するようになり、それ以北とは異なる土器型式圏となる。下越地方や会津地方では、鳥屋 1式の分布圏に鳥屋 2式が分布するが、浜通り・中通り地方では、山形県南部や宮城県南部と同様の特殊工字文土器群が分布するようになる。したがって、大洞 A₂式併行期は、土器型式圏に大きな組み換えが起こる時期といえる。

こうした土器型式の分布は、次の大洞 A'式併行期

にも引き継がれている。山形県北部と宮城県北部以北では、大洞 A'式土器が分布する。山形県南部や宮城県南部から浜通り・中通り地方では、引き続き特殊工字文が分布する。下越地方と会津地方も変化はなく、鳥屋 2式が分布し続ける。

つまり、土器型式の分布という視点からは、東北地方南部では、大洞 A₁式併行期から A₂式併行期に東北地方中部と連動して大きな組み換えが起こった。

一方、4-5で明らかにした粗製土器の分布圏は、東北地方中部と南部に境界があり続け、組み換えが起こらない(図26)。大洞 A₁式併行期には、東北地方中部の粗製土器は縄文施文の深鉢のみである。一方で、東北地方南部全域で条痕文が使用された。この傾向は大洞 A₂~A'式併行期にも引き継がれる。東北地方中部では縄文施文の深鉢のみあるが、東北地方南部では、全域で深鉢と甕があり、それぞれに縄文と条痕が使用される。つまり、浜通り・中通り地方で、粗製土器からみた土器文化圏は、精製土器の文様を中心にみた土器型式圏と大きく異なるのであり、分布圏の組み

換えは起こらない。

5. 結論

本稿は、東北地方南部における縄文時代晩期後半の土器型式について、分布圏の動態を明らかにした。

まず、東北地方南部の土器研究は、大洞式土器と鳥屋式土器の双方からの研究があり、それぞれで福島県域の土器の型式内容が曖昧であるという問題点を抽出した。つまり、①「特殊工字文土器群」が東北地方南部にも分布する可能性はないのか。②東北地方南部の土器型式の分布圏はどのようなものか、という問いを導き出した。

これらの問いに答えるために、下越地方、会津地方、浜通り・中通り地方の土器について、器種と文様、文様帯という3点を中心に、それぞれの地域で3段階の段階設定を行った。この段階設定を時空間軸の基準とした上で、これらの段階を器種・文様・文様帯の3点から型式にまとめ、鳥屋1式は壺・浅鉢+工字文風の文様+Ⅱ'文様帯の欠落、鳥屋2式は浅鉢+浮線文+甕(Ⅱ'文様帯)の登場、連郷B段階は浅鉢+工字文風の文様+特殊な文様帯の存在、特殊工字文土器群は浅鉢+特殊工字文をもつ土器の一群と定義した。さらに、時期ごとにその分布圏を明らかにした。その結果、大洞A₂式併行期に、浜通り・中通り地方が山形県南部や宮城県南部と同じ特殊工字文土器群の分布圏となっており、この時期に土器型式の分布が大きく変化したことが明らかになった。一方で、粗製土器からみた土器文化圏は、大洞A₁~A'式併行期で一貫して、東北地方中部と南部の間に境界があり、大きな組み換えが起こらなかった。

上記した土器型式の分布圏の変化は、他の物質文化と連動しているとみるべきである。こうした変化の中で、地域間交流にも大きな組み換えが起こり、その結果として大洞A'式併行期や弥生時代前期に物質文化全般の地域性が生じたと考えられる。また、精製土器と粗製土器で分布圏が異なる背景も、明らかになる可能性がある。したがって、地域間交流を示す他の要素と土器型式の分布圏を合わせた研究が、今後の課題である。

謝辞

本稿は2023年度に東京大学大学院人文社会系研究科に提出した修士論文の一部を大幅に書き改めたものである。指導教員である根岸洋先生を始め、考古学研究室の福田正宏先生、森先一貴先生、新井才二先生にご指導を賜った。2024年3月23日の弥生時代研究会では、石川日出志先生(明治大学)、大坂拓氏(北海

道博物館)、佐藤祐輔先生(東北芸術工科大学)をはじめ、皆様からご指摘を賜った。関根史比古氏(安中市文化財課)、富高直人氏(福島県文化振興財団)からは、本稿の構想を練り上げる上で、多くの教示を得た。また、以下の個人・機関からもご協力を得た。記してお礼申し上げます。

木幡成雄・高島好一・高橋忠道・渡邊芳一(いわき市教育文化事業団) 佐々木由香(金沢大学古代文明・文化資源学研究所) 荒木麻衣・垣内和孝・工藤健吾(郡山市教育委員会) 渡邊美穂子(新発田市教育委員会) 荒川隆史・佐藤友子(新潟県埋蔵文化財調査事業団) 菅野崇之(福島市振興公社) 穴戸拓登(福島市文化振興課) 鶴見諒平・本間宏(福島県文化財センター白河館)(敬称略・順不同)

本研究はJST次世代研究者挑戦的研究プログラム(JPMJSP2108)、JSPS特別研究員奨励費(25KJ1121)の支援を受けた。

註

- 1) 鈴木^加(1991)が「南奥」とした範囲は、会津地方と浜通り・中通り地方に該当する。鈴木^正(1987)が「南奥」とした範囲には岩手県域や秋田県域が含まれるが、本稿ではこの範囲は東北地方中部とする。
- 2) 石川(1991)は鳥屋1式~直後段階に甕が出現すると指摘した。
- 3) 保明浦遺跡SI-101は荒川・阿部(2022:82頁)で鳥屋1式期の住居である可能性が指摘されている。
- 4) 荒川編(2004:263頁)に同様の指摘がある。
- 5) 浮線文モチーフの少なさは、下越地方と比べた基準資料の土器数の少なさに起因する可能性がある。
- 6) 弥生時代前期には、福島県大熊町道平遺跡(渡辺編1983b)や作B遺跡(高島・矢島編2004)に、山形盆地からの搬入品と考えられる土器がある。

引用文献

- 荒川隆史 2018 「北陸の縄文晩期社会と社会組織」鈴木克彦編『「亀ヶ岡文化」論の再構築』雄山閣, 49-54
- 荒川隆史 2023 「北陸地方」根岸 洋・設楽博己編『縄文時代の終焉』雄山閣, 31-34
- 荒川隆史編 2004 『青田遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書133
- 荒川隆史・阿部泰之 2022 「保明浦遺跡における縄文・弥生移行期の墓域について」『新潟考古』33:79-98
- 石川日出志 1984 「岩尾遺跡出土資料の編年的位置づけと特色」『史館』16:71-84
- 石川日出志 1985 「中部地方以西の縄文時代晩期浮線文土器」『信濃』37(4):152-169
- 石川日出志 1988 「鳥屋式土器の構成と意義」『豊栄市史資料編1』豊栄市教育委員会, 335-352
- 石川日出志 1991 「縄文時代晩期浮線文土器出現期の編年と諸様相」『北越考古学』4:9-22
- 石川日出志 1993 「鳥屋2b式土器再考」『古代』95:208-225

- 石川日出志 2002 「青田遺跡の土器を読む」『川辺の縄文集落』新潟県埋蔵文化財調査事業団, 48-55
- 石川町教育委員会 1986『鳥内遺跡』石川町埋蔵文化財調査報告書16
- 磯崎正彦 1957 「新潟県鳥屋の晩期縄文式土器(予報)」『石器時代』4:22-35
- 磯崎正彦 1964 「晩期の土器」山内清男・甲野 勇・江坂輝弥編『日本原始美術1 縄文式土器』講談社, 170-173
- 磯崎正彦・上原甲子郎 1969 「亀ヶ岡式文化の外郭圏における終末期の土器型式」『石器時代』9:55-86
- 伊東信雄 1970 「稲作の北進」『古代の日本8 東北』角川書店, 22-42
- 今村啓爾 1983 「文様の割り付けと文様帯」『縄文文化の研究5』雄山閣, 124-150
- 植村泰徳・加藤義昭・新堀昭宏・鎗城 潔・丹野隆明・高橋英雄編 1997『大平・後関遺跡2』福島市埋蔵文化財報告書102
- 梅宮 薫・富田真衛編 2008『大平・後関遺跡4』福島市埋蔵文化財報告書197
- 梅宮 茂 1964 「縄文」『福島県史』福島県教育委員会, 2-3
- 大坂 拓 2009 「大洞 A2 式土器の再検討」『考古学集刊』5:39-74
- 大坂 拓 2012 「本州島東北部における初期弥生土器の成立過程」高瀬克範編『江豚沢遺跡 I』江豚沢遺跡調査グループ, 144-181
- 小野章太郎・西村 力・吉川昌伸・吉川純子・早瀬亮介編 2021『北小松遺跡』宮城県文化財調査報告書255
- 角田市教育委員会 1976『梁瀬浦遺跡』宮城県角田市文化財調査報告1
- 工藤竹久 1987 「東北北部における亀ヶ岡式土器の終末」『考古学雑誌』72(4):39-68
- 熊谷幹男・佐藤好一編 1990『赤生津遺跡』仙台市文化財調査報告書139
- 黒坂雅人・豊野潤子編 2003『釜淵 C 遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書115
- 小久保竜也 2023 「北上川流域を中心とした大洞 A 式土器編年の再検討」『東京大学考古学研究室紀要』36:97-113
- 小久保竜也・富高直人 2025 「郡山市滝ノ口遺跡出土土器の研究」『福島考古』39:1-20
- 小柴吉男編 1990『荒屋敷遺跡』三島町文化財報告書10
- 小滝利意 1961 「会津盆地に於ける縄文式晩期より弥生式土器について」『会津史談』37:69-92
- 木幡成雄・矢鳥敬之・江川逸生編 2000『連郷 B 遺跡』いわき市埋蔵文化財調査報告70
- 小林圭一・大泉壽太郎 1997『北柳 1・2 遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書48
- 斎野裕彦 2011 「東北地方」甲元眞之・寺沢 薫編『講座日本の考古学5:弥生時代(上)』青木書店, 430-484
- 坂井秀弥編 1989『山三賀 II 遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書53
- 設楽博己 1994 「壺棺再葬墓の起源と展開」『考古学雑誌』79(4):1-40
- 新発田市教育委員会 1982『村尻遺跡 I』新発田市埋蔵文化財調査報告4
- 志間泰治編 1971『鱸沼遺跡』東北電力株式会社宮城支店
- 鈴木良一・山内幹夫・松本 茂・三品勝幸・吹野富美夫・庄司孝雄編 1988『真野ダム関連遺跡発掘調査報告Ⅻ』福島県文化財調査報告書194
- 鈴木良一・三品勝幸・山内幹夫編 1989『真野ダム関連遺跡発掘調査報告ⅩⅢ』福島県文化財調査報告書210
- 鈴木加津子 1991 「安行式文化の終焉(2)」『古代』91:47-113
- 鈴木正博 1987 「続大洞 A₂ 式考」『古代』84:110-133
- 鈴木正博 2003 「「遠賀川式」文様帯への型式構え - 埼玉における「綾杉文系土器群」の位相と「綾杉文系土器群」への「文様帯クロス」-」『埼玉考古』38:3-23
- 関根達人編 2023『国史跡山王冨遺跡の研究Ⅳ』弘前大学人文社会科学部北日本考古学研究センター
- 関根史比古 2021 「浮線文土器群における沈線文技法」『靱』10:111-120
- 高島好一・矢鳥敬之編 2004『作 B 遺跡』いわき市埋蔵文化財調査報告105
- 高瀬克範 2000 「東北地方における弥生土器の形成過程」『国立歴史民俗博物館研究報告』83:61-96
- 高橋龍三郎 1993 「大洞 C₂ 式土器細分のための諸問題」『先史考古学研究』4:83-151
- 田畑 弘編 2003『保明浦遺跡Ⅲ』田上町文化財調査報告書20
- 田中耕作・鶴巻康志編 1992『館ノ内遺跡 D 地点の調査』新発田市埋蔵文化財調査報告14
- 富田真衛編 2009『大平・後関遺跡5』福島市埋蔵文化財報告書200
- 中村五郎 1982『畿内第一様式に並行する東日本の土器』
- 中村五郎 1988『弥生文化の曙光』未来社
- 芳賀英一・藤谷誠編 1986『腰巻遺跡 下谷ヶ地平 B・C 遺跡』福島県文化財調査報告書164
- 林 謙作 1981 「縄文晩期という時代」鈴木公雄・林 謙作編『縄文土器大成4:晩期』講談社, 130-136
- 平山久夫・安藤幸吉・中村五郎 1971 「山内清男先生と語る」『北奥古代文化』3:59-80
- 古川利意編 1987『窪田遺跡』只見町文化財調査報告書3, 纂修堂
- 古川利意・白井美也・小澤弘道・芳賀英一編 1986『金山遺跡』福島県山都町文化財調査報告8
- 堀江 格・引地光太編 2005『大平・後関遺跡3』福島市埋蔵文化財報告書177
- 松本 茂・吹野富美夫・鈴木良一・三品勝幸 1988『真野ダム関連遺跡発掘調査報告Ⅺ』福島県文化財調査報告書193
- 三浦一樹 2016 「北上川中流域における砂沢式併行土器」根岸洋編『大曲遺跡・砂沢遺跡』国際教養大学アジア地域研究連携機構研究報告書1・文化遺産研究報告1, 77-87
- 馬目順一・古川 猛 1970『福島県郡山市一人子遺跡の研究』南奥考古学研究叢書1
- 村上章久編 2015『山口野中遺跡2』新潟県埋蔵文化財調査報告書258
- 目黒吉明・佐藤勝夫・鈴木良一・松本 茂編 1986『真野ダム関連遺跡発掘調査報告Ⅷ』福島県文化財調査報告書165
- 森谷昌央・佐藤正俊・稲村圭一編 2000『北柳1遺跡第2次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書76

森谷昌央・佐竹桂一・黒坂広美編 2003 『砂子田遺跡第2次・第3次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書113

山内清男 1930 「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄文式土器の終末」『考古学』1(3):139-157

山内清男 1964 「文様帯系統論」山内清男・甲野 勇・江坂輝弥編『日本原始美術1 縄文式土器』講談社, 157-158

吉野滋夫編 2022 『只見川流域築堤工事遺跡発掘調査報告：小和瀬遺跡』福島県文化財調査報告書546

渡辺一雄編 1983a 『沢口遺跡』福島県山都町文化財調査報告書3

渡辺一雄編 1983b 『道平遺跡の研究』大熊町文化財調査報告3

渡辺一雄・馬目順一編 1966 『寺脇貝塚』磐城市教育委員会

図版出典

図1：馬目・古川(1970)

図2・7・14・23・24：筆者作成

図3-1～12：田中・鶴巻編(1992)

図4-1～3：田中・鶴巻編(1992)；4～13：荒川ほか編(2004)

図5-1～31：荒川編(2004)

図6-32～48：荒川編(2004)

図9-1～41：荒川編(2004)

図10-42～55：荒川編(2004)

図8：青田遺跡出土土器(新潟県埋蔵文化財センター蔵)を撮影

図11-1～38：渡辺編(1983b)

図12-1～3：渡辺編(1983b)；4・6～8：芳賀・藤谷編(1986)；5：小柴編(1990)；9～12：吉野編(2022)

図13-1～14・16～31：芳賀・藤谷編(1986)；15：古川編(1987)

図15-1～27：吉野編(2022)；28・29：小柴編(1990)

図16-1～28：木幡ほか編(2000)

図17-1・2：木幡ほか編(2000)；3～6：鈴鹿ほか編(1988)；7～10：高島・矢島編(2004)

図18-1～38：鈴鹿ほか編(1988, 1989)

図19-1～36：高島・矢島編(2004)

図20-1～37：目黒ほか編(1986)

図21：大坂(2012)

図22-1～16：黒坂・豊野編(2003)

Changes in Distribution of Pottery Types from the Final Jomon Period in Southern Tohoku

Tatsuya KOKUBO

Previous studies have suggested that Ohora (大洞) type and Toya (鳥屋) type pottery groups existed during the Final Jomon period in southern Tohoku, however, the distribution areas for each group remained ambiguous due to the limitation of data. To resolve this issue, this paper re-examined the pottery typology from the Final Jomon in southern Tohoku. I subdivided Final Jomon potteries from Kaetsu (下越), Aizu (会津), and Naka-dori (中通り) / Hama-dori (浜通り) into three phases respectively based on the material sets or the materials with a precise stratigraphic information, then presented the vessel types, the decoration pattern, and the pattern-band (文様帯) for each phase. By combining these three elements, I re-defined 4 pottery types: Toya-1, Toya-2, unnamed type, and Tokushu-Kojimon (特殊工字文) pottery groups. Subsequently, I examined the distribution of these pottery types and compared with potteries from neighboring Yamagata and Miyagi Prefecture. The result shows that Ohora type is almost absent in Southern Tohoku, instead, Toya-1 and -2 distributed in Kaetsu and Aizu areas. On the other hand, Tokushu-Kojimon pottery groups, spread from southern Yamagata to Miyagi Prefectures, covering Hamadori and Nakadori areas, thus it is suggested that the border between Toya type and Tokushu-Kojimon pottery groups would have been in the east of Inawashiro lake. In addition, the dynamics of pottery-type spheres indicates that the establishment of Tokushu-Kojimon pottery groups led to restructure those spheres significantly during the period parallel to Ohora A₂ type.